

第20回

森林と市民を結ぶ 全国の集い 2016 in 東京

温故知森 ～森と私たちを結ぶ新たな道～

6.11(土) - 6.12(日) 東京農業大学 世田谷キャンパス

報告書

主 催

「2016 森林と市民を結ぶ全国の集い in 東京」実行委員会
公益社団法人 国土緑化推進機構

後 援

林野庁／東京都／全国知事会／全国市長会／全国町村会／
全国森林組合連合会／一般社団法人 日本林業協会／東京農業大学

事務局

特定非営利活動法人 森づくりフォーラム

森林と市民を結ぶ 全国の集い 2016 in 東京

温故知森 ～森と私たちを結ぶ新たな道～

6.11_(土) – 6.12_(日) 東京農業大学 世田谷キャンパス

報告書

この「集い」は「緑と水の森林ファンド」の助成を受けて実施しました。

目 次

開会趣旨・日程	3
開 会 式	
開会あいさつ 内山節 実行委員長	4
20回目を迎えた「集い」の歴史とこれから 鹿住貴之 副実行委員長	6
全 体 会	
講演 西村佳哲 「私たちはどこにいるのかー街から森へー」	9
トークショー 「街から森をめざす若者、登場！」	15
分 科 会 発表者・コーディネーター・概要報告・若者レポーター報告	
第1分科会 【生きる】元気に山で暮らす	32
第2分科会 【遊ぶ】森を遊びつくそう	38
第3分科会 【学ぶ】先人の知恵に学ぼう	43
第4分科会 【デザイン】森の「抗えない魅力」の謎をデザインで解く	49
第5分科会 【エネルギー】木質バイオマスの可能性をさぐる	56
全 体 会	
「2015 森林と市民を結ぶ全国の集い in 福島」の報告 フクシマ環境未来基地 本宮滉也	62
資 料	
「森林と市民を結ぶ全国の集い」20年の歴史	66
参加者アンケート	67
「2016 森林と市民を結ぶ全国の集い in 東京」実行委員 スタッフ名簿	79

開催趣旨

温故知森 ～森と私たちを結ぶ新たな道～

森林ボランティア団体の情報交換などを目的にして、1996年に第1回「森林と市民を結ぶ全国の集い」を東京で開催しました。その後、1年に1回各地で開催し、2016年東京開催が第20回となります。

この20年、私たちを取り巻く環境は大きく変化しました。そして、森林も、森林と私たちの関係も変化してきました。

この20年、都市集中はさらにすすみ、各地で過疎化や高齢化が問題になっています。人びとの自然環境への関心や森林への期待は高まってきましたが、森林をめぐる状況は厳しいままにあります。

その一方、生活のなかに森や木を取り入れ、さらには農山村地域での生活を志向する都市住民が多くなっています。新たな価値観で、森林や木材などを活かしていこうとする動きも各地に現われています。それは、歴史・文化に根ざした精神的な領域での価値の見直しも含まれています。

いま、多くの人が、森林とともにあることの豊かさに気づいています。

「2016 森林と市民を結ぶ全国の集い in 東京」では、さまざまなかたちで森林を活かす取組みに出会えます。そこから、森林への新たな道をひらきましょう。

日 程

6月11日(土) 東京農業大学世田谷キャンパス

- 13:00 ～ 13:40 開会式(横井講堂)
- 13:40 ～ 14:30 講演 西村佳哲
- 14:40 ～ 16:50 トークショー「街から森をめざす若者、登場!」
- 16:50 ～ 17:30 各分科会の紹介
- 17:50 ～ 19:50 交流会(レストラン すずしろ)

6月12日(日) 東京農業大学世田谷キャンパス

10:00 ～ 14:00 分科会 ※昼食(12:00～13:00 頃・各分科会による)

第1分科会:生きる(教室番号:511)

第2分科会:遊ぶ(教室番号:521)

第3分科会:学ぶ(教室番号:512)

第4分科会:デザイン(教室番号:513)

第5分科会:エネルギー(教室番号:522)

14:15 ～ 全体会(横井講堂)

アルパ演奏 倉品真希子

「2015森林と市民を結ぶ全国の集いin福島」報告 フクシマ環境未来基地 本宮滉也

14:45 ～ 15:35 各分科会報告(若者レポーター)

15:35 ～ 15:45 閉会式

開会あいさつ

内山 節 実行委員長

森

林ボランティアの活動は、早いところでは1970年代前半から始まりました。その頃、私たちにはひとつ悩みがありました。それは、森林とかかわる以上、やはり長期的にかかわらざるを得ないのであって、1年だけ山仕事をやって終わりというわけにいかない。市民グループが何十年も山と付き合い続けることは果たして可能なのかということでした。

「森づくりフォーラム」はこれまでに20年ほど活動していて、NPOとして長続きしていると思います。ただ、森林のことを考えていくと、20年から30年ぐらいいで「長い」というわけにいきません。市民が、50年から100年、場合によっては200年、そういう期間森とかかわっていく仕組みはどうやっていけるのか、それがひとつの悩みでもありました。

最近、若干その方向性が見え始めたと感じています。といいますのは、一つの団体が長期にわたってかかわるというよりも、新しい団体が生まれてきている。そうしてちょうど林業をやっている人たちは、おじいさんが植えた木を孫が伐る、という世代を超えたつながりがあります。そうした継続が市民グループでもできるかもしれない、その兆しが見えたように感じています。

森林ボランティアの活動が始まって初期に活動をしていた人たちは、だんだん高齢化してきています。当然ながらこれから先、何十年間もの付き合いはできない、ということになります。けれども、この数年、新しく森とかかわる人たちがいたところで生まれていて、その人たちと昔からやってきた人たちがつながりあって、森と人間の関係を更新している。新しい人たちが登場しながら、上手に森とかかわってきた人となつがっていく。そういう形で50年とか100年



内山 節 実行委員長

にわたって市民が森とかかわるという仕組みができていくかもしれない。そういうことが見え始めたということです。

今回の「森林と市民を結ぶ全国の集い」は、若い人たちが主軸になって企画を組んでいく、という形になっています。それは私たちとしては嬉しいことでもあります。同時に、また若い人たちが中心になってやっていくと、森とのかかわり方も多様になってくる。森林ボランティアの活動も、元々は林業者の森とのかかわり方、それをいわば多少真似ながら少し市民的に緩やかにするような、そんな形で進んできました。そこに、もっと多様な形での森とのかかわり方を求める人たちが現れてきている、と感じています。

今回は、分科会のテーマ設定も、そうした若い人たちの発想力も活かす形で行われます。

これは言うまでもないことですが、日本の社会とい

うのは、これから何が起こってくるかわからない。災害の多い地域でもありますし、世界情勢・経済情勢などそういう問題も含めて、一体何が起こってくるのかよく分からないという時代を迎えています。

ただ、何が起こるか分からないというような時代状況の中で、それに何とか対応していくことができるかどうか。それは多様な活動が存在するかどうか、にかかわっているという気がしています。どんなことが起きても、それぞれの人たちが自分たちの考え方で動いていける。しかもやり方も多様である、そういう多様性を持っていることが、いちばん柔軟な社会をつくっていく、という気がしています。

森林と人間の関係の中に出てきている多様性、これは私たちの社会をつくっていくうえで重要になっていくのではないだろうか、という気がします。

また、日本の社会というのは、元々多様性を持っていたのだと思うわれます。日本の自然は極めて複雑です。自然自体が多様である。その日本の自然と人間たちがかかわって生きていこうとすると、地域ごとにそれぞれ特徴のある生き方、暮らし方とか、社会のつくり方とか、そういうことができなければうまくいかない。海辺の地域には海辺の生き方ができてくるし、山奥には山奥の生き方ができてくる。海辺といってもすぐ後ろが山である、というような地

域もある。北海道から沖縄まで実に多様な自然がある、その多様性ととも、人間たちも多様性をつくってきました。

とすると、多様な生き方をつくっていく。あるいは多様なかかわり方をつくっていくということは、日本社会の本来のものに少しは戻っていくということを意味するだろうという気がします。戦後の日本の社会というのは、どちらかというと多様性ではなく、画一化の方向に向かってしまった。画一的な方向に向かってしまうと、うまくいっているうちはうまくいっているようにみえるのですが、それがちょっとうまくいなくなると、本当に対応能力がないという状況をつくってしまった。

そういうものも含めて、是正しながら私たちはより良い社会をつくっていかななくてはならないし、その時に日本の自然の多様性に対応していくような多様なかかわり方、多様な社会のつくり方。それをどこかに意識しておかなくてはならないという気がします。

いま、森林と人間のかかわりの中に、多様なかかわりが生まれてきたことは心強いことだと思っています。この動きを定着させ、さらに力強いものにしていく、そういうことができるような今回「集い」になればと思います。

主催者あいさつ

梶谷 辰哉 公益社団法人国土緑化推進機構 専務理事



来賓あいさつ

中井 正博 林野庁 森林・木材産業情報分析官



20回目を迎えた「集い」の歴史とこれから

鹿住 貴之 副実行委員長

JUON NETWORK 事務局長の鹿住と申します。今回の事務局を担当している森づくりフォーラム常務理事も務めています。

今回の「集い」が20回目ということで、今回の趣旨、目的あるいはねらいを共有するために、お話しさせていただきます。過去20回のテーマは、お手元にあるプログラムの最初に掲載しています。また、お配りした森づくりフォーラムのニュースにも同じものがあります。

第1回は1996年、代々木のオリンピック記念青少年総合センターで800人の参加者が集まった20年前です。ここから数年を見ていただくと、「市民が支える森づくり」をテーマとして、しばらく続いているのが分かります。当時「市民参加の森づくり」ということが広がっていく中で、こういった全国的な集いを、各地で出てきたものを広げていこうと開催しました。当時、市民が林業とか森林に入っていくということで、各地で個別に活動しながら悩んでいた。そこでつながっていこうとやってきたわけです。



第1回「森林と市民を結ぶ全国の集い」
1996年東京



第1回「森林と市民を結ぶ
全国の集い」報告書

2回目も東京で開催し、第3回は大阪、第4回は宮城で開催しています。宮城の大会の時に私も初めて参加しました。その次が高知で、私も参加し次の6回目



鹿住 貴之 副実行委員長

の東京開催から私も実行委員になり、以降東京で開催するときには実行委員として関わっています。さて、この「市民が支える森づくり」というところから、時代を追ってくると、「暮らし」とか、「暮らしとともに築く」、第6回あたりからですけれども、「暮らし」や「活かす」「利用する」という、ご承知の通り木材資源の蓄積量がかなり増えていて、利用の時代になってきている。そこが現在のポイントでもあるかと思いますが、「利用する」とか、それを暮らしの中にどう「取り込み」「活かす」か、あるいは、そういう社会にどうしたらしていけるか、というようなテーマになっていきました。つまり、「市民の参加する森づくり」というところから広がって、「社会」や「地域」、「暮らし」というところに広がってきていることが見て取れると思います。

最初の頃は全国各地で開催していて、その地域での森づくりグループのネットワークを進めるという役割を、この「集い」が果たしてきたと思います。あるいは、その地域に対して、森づくりの活動を広げてい

くということもありました。広島開催のときは、地元の方が800人ぐらい集まって、高校生も含めてシンポジウムをやりながらネットワークをつくっていく。そういったこともやってきました。そして、13回目の福岡開催で、全国津々浦々ではありませんけれども、北海道、東北、四国、九州など各地を回った形になりました。また、インターネットの普及もあり、これからの「全国の集い」にどういったことが求められるかを検討することになります。第14回からは2年に1度東京開催、それ以外の年は各地域で開催する、つまり、東京、各地、東京、各地と開催することになりました。

2011年は事業年度の関係で2回開催になったのですが、その2011年は国際森林年でした。そこで、「世界森林アクションサミット」と題して、世界的に森づくり活動をやっている人たちにも来ていただき実施しました。

さて、2回前の東京開催である第18回を見ていただくと、「都市の視点から考える」となっていますが、今回もそれを引き継いでいるところがあります。例えば、林業政策で、間伐が必要だから、間伐材で商品をつくって売ろうと山側だけで考えがちですが、山側でつくったものが都市住民に受け入れられるかということ、デザインが格好悪くてうまくいかないというようなこともあります。その意味で、都市的な視点から山側のことを考えていこうと、「暮らし」の分科会、「教育」の分科会、「食」の分科会、「エネルギー」の分科会、そして、「女子会」の分科会と、5つをテーマにして、前回の「集い」は開催しました。

また、森づくりフォーラムニュースに2015年に行った「森林づくり活動についての実態調査」の結果を掲載しています。元々林野庁でやっていたのですが、昨年度は森づくりフォーラムで手をあげて実施しました。2ページの下に、森林ボランティア団体の数の推移のグラフがあります。掲載されている最初の2000年の3年前に、初めてアンケートが実施されています。その1997年には、277団体でしたが、それから3年ごとに調査が行われました。森林ボランティア活動の経

緯については内山実行委員長からのお話でもありましたが、1970年代ぐらいから早稲田大学の思惟の森の会の岩手での活動や、74年から富山で草刈り十字軍もスタートしています。東京では1986年の雪害をきっかけに市民が山に入り始めたと言われています。そういった中で、東京における森林ボランティア活動がつながろうと、1995年に関東ローカルで森づくりフォーラムができあがって参りました。2000年には、NPO法人として森づくりフォーラムが全国ネットワーク化します。

今回のアンケート調査については、詳細な分析をしている最中で、クロス集計によって、どのようなタイプの団体にはどういった特徴があるかなど、今整理しているところです。速報の段階ですと、3ページに「二極化しつつある」と書かれているかと思います。まず、大規模な活動をする団体が出てきました。森林ボランティア活動の中で、主伐をするとか、建築用材を搬出して市場に持っていくとか、材を売っていくような団体も出てきました。これは、今回の調査で分かった大きな特徴かと思っています。森林ボランティア活動の外縁の広がりというような、これまでの定義に収まらない動きが出てきたということがあげられます。もう一つ、二極化で言えば、協定を山主さんと結んだり、中長期計画を立てたり、また、機械を使用するとか、かなり専門特化している団体がある一方で、高齢化ですとか、4～5ページにある、「ネットワークへの参加減少傾向」ということもあります。今回と前回の調査と比べると、外に対しての活動が弱まっているのではないかと、という傾向が出てきています。この内向きの傾向があることと、団体数が減少していることに相関関係があるかどうかは、今分析しているところですが、このような現状をアンケートから見るができます。

「集い」の話に戻りますが、今回のテーマは「温故知森～森と私たちを結ぶ新たな道～」です。2年前の東京開催での都市的な視点を受け継ぎつつ、新しい視点を持つことで、新しい人たちに入ってきてもらお

20回目を迎えた「集い」の歴史とこれから

う、という考え方で分科会を組み立ててきました。実行委員会の議論の中で出てきたキーワードなのですが「豪族2.0」という言葉をご存知でしょうか。かつていた豪族ではなくて、最近は農山村地域や過疎地域に入って「一旗揚げたい」と、国造りに参加するような心持ちの人たちをそう呼ぶようです。また、「小屋サミット」というものがあるそうです。木造だけではないかもしれませんが、木造の小屋を造る愛好家たちの集まりがあって、結構な数の人たちが集まって開催されているそうです。さらに森の中でヨガをするとか、健康ブームもあります。他にも、いろんな新しい形があって、日曜大工を好む「D.I.Y女子」。今「～女子」というのが増えていますけども、こういった活動は、直接森林ボランティア活動と一体なものではないですが、森林づくり活動と非常に親和性が高い活動ですよ。こういったこととつながっていくことが、これからの森づくり活動にとって重要なのではないかと考えました。そこで、今回新たな切り口ということで、「生きる」「遊ぶ」「学ぶ」「デザイン」「エネルギー」という分科会を考えました。「新たな切り口」「新しい人」

ということを意識しました。直接の森林整備だけでなく、木を使うということも含めてですけれども、新たな方法を考えていきたいと思っています。

また、前々回の東京、前回の福島大会に続き、今回も「若者レポーター」に加わっていただいて、活動のサポートと、その報告をしていただくことも行います。これも、ここ数年の新しい取り組みです。若い人たちにどんどんつないでいこうということで、前回福島の「集い」でも行ったのですが、その時から今年までに、福島県内では若者と先輩方との新しい結びつきが出てきた。それを明日の最後の全体会で、報告していただく予定ですが、こうしたことも「全国の集い」がきっかけで生まれたことです。

さて、この後の基調講演では、今どういう時代にあるのかということも含めて話題提供をしていただきます。そしてその後、若者として山村地域に入っている人たちの実際の声を聞かせていただく、というプログラムを用意しています。

趣旨の確認・共有の時間ということで、お話をさせていただきます。ありがとうございました。

会場の様子



受付周辺には森林やボランティア活動の資料が展示されました。



横井講堂(全体会会場)は、内装にヒノキ材が使われています。

講演 西村 佳哲

「私たちはどこにいるのか ―街から森へ―」

歴

史の長い「集い」にお呼びいただき、ありがとうございます。この集いの講演を、私が担わせていただいて良いのか、相応しくないのではと感じていました。でも、お断りせずにやってきた理由は、今回の内容が、私自身勉強したい事と重なっていたからです。そして、お会いしたい人たちの名前がプログラムに連なっていたこともあり、お引き受けいたしました。

「私たちはどこにいるのか」というタイトルだったのですが、それに「街から森へ」という言葉を加えたいと思います。私自身は、若くはないのですが、団塊世代というわけでもなく、その中間くらいです。その私は、2年ほど前から中山間地域に拠点を移して仕事をしています。「街から森へ」というのは、私自身の今の在りようでもあるので、次につながる部分もあるかもしれないという事で、このタイトルでお話ししたいと思います。

かつて中山間地に暮らしの場を求める人は、リタイアした、脱都会指向の中高年者という印象でした。けれども最近は、若い人たちが中山間地に移動し、新しい営みをつくり始めていますね。

僕は30歳までは大きな会社で働いていて、その後独立し、妻と会社をつくり、「つくる」と「書く」と「教える」、大きくわけて3種類の仕事を手がけています。

「つくる」はデザイン業務の請負ですが、同時に、自分たち自身が商品を開発し販売するメーカーポジションの仕事もしています。ガラスの立方体に、国立天文台の銀河系の恒星データを8万点レーザーで打ち込んでつくっている立体模型もあります。それを今は、徳島県神山町の郵便局から、オーダーに応じて中国やアメリカやヨーロッパに発送しています。



西村 佳哲さん

私は30歳までゼネコンの設計部で働いていました。辞めてから建築からは離れていないのですが、ここ3・4年で建築系の仕事が増えています。たとえば「箱根山テラス」。これは岩手県陸前高田市にある施設です。陸前高田は平野部が津波に流されました。その経営者たちと出会い、月に1回くらい通うようになった。その中で彼らと話し、とりあえず泊まれる場所と、コミュニケーションを育ててゆける空間をつくろうという話になり、「箱根山テラス」が形になりました。

東北沿岸部の宿泊施設は工事関係者等で埋まっていて、一般の人が泊まれる施設が少ない。コミュニケーションを積み重ねてゆける場所が少なく、鳥で言うところの止まり木のような場所が一切なかったのも、それをつくる。あと、公園的な場所もなくなってしまったので、広いウッドデッキでそんな空間をつくってみよう。

隣町の住田町は林業の町です。その木質資源を循環させる。人的な資源も循環させる拠点づくりです。

設計者を紹介したり、とりまとめたりつないだり、という立場で動きました。

施設は1年ほど前に完成。以降は利用する側に移り、「箱根山学校」という3泊4日のイベントで毎年20～30名の参加者と滞在しています。これからの営みや、その空間づくり、あるいは仕事づくりについて語り合い学び合う4日間です。今年も9月に開催します。

この箱根山テラスという場所は、非常に風通しがいい空間性を持っていて、不思議と心も風通しがよくなるといいますか、クリアになる感じがします。関心がありましたら「箱根山テラス」で検索していただければと思います。被災地と呼ばれる場所に行ったことがないけれども、いまどんな状況なのか知りたい。そんな興味でも構わないので、足を運んでいただけると嬉しいです。



「箱根山テラス」岩手県陸前高田市

「書く」仕事としては、最初に『自分の仕事をつくる』という本を書きました。

ゼネコンにいたので、大きな会社の人々の働き方はよく知っていました。説明資料を人数分刷って、口の字型に並べた長机に配って「お手元の資料をご覧ください」と進めるような会議形式はよく知っている

わけです。

けれど自分は、もうそういう会議はしないとわかっていたので、これからの働き方についてあらためて勉強したいと思いました。

自分が尊敬する作り手を世界各地に訪ねて、彼らの働き方の子細を根掘り葉掘り訊いて回りました。チーム内でどんな風にコミュニケーションをとっているのか。ミーティングスタイルはどんなふうか。どのように情報共有しているのかなど。デザイン誌の連載の形で訪ね、それをまとめたものです。

その後何冊か本を書いて、10年後に『ひとの居場所をつくる』という9冊目の本を書きました。タイトルは最初の本と同じ構造で、「自分」が「ひと」に、「仕事」が「居場所」になっています。自分自身の関心の移り変わりが、よく表れているなあとと思います。最初は働き方に関心があったわけです。「働き方」という言葉は、最近よく耳にします。大きな会社も「働き方の改革」をうたっている。ミーティングのやり方をクリエイティブにするとか、副業を可能にするとか、あるいは子育てと仕事を両立できる制度や仕組みをつくとか。どれも大切なことだと思うけれど、最近の「働き方改革」を僕はだいたい冷めた目で見ています。

「働き方の改革ではどうにもならないし、救われない」という気持ちがあるんですね。どんなに働き方をクリエイティブにしたところで、その会社の仕事が貧富の差をより広げることであったり、より環境に負荷を与えたり将来世代にツケを残すようなことであったり、やればやるほど世界を劣化させるもののだとしたら、働き方をいくらクリエイティブにしたところで何の意味もない。

今、この社会で働く人々は、「意味が感じられる仕事の不足」という危機に直面していると思います。多くの会社や行政機関で、「本当にこの仕事を続ける意味があるのかな?」とつい思ってしまうような仕事が増えている気がする。「なんのための仕事?」と。

「意味のない仕事をやり続ける」ことは、人の精神を痛めつけます。ロシアに、底に穴が開いているバ

ケツでA地点からB地点に水を運び続ける刑罰がある、と聞いたことがあります。怖いなあというか、「意味を感じられない労働」が、どれだけ人を痛めつけるか知っている人が考えたのでしょう。でもいまロシアの流刑地でなくても、多くの人が同じような状況に置かれているのではないのでしょうか。

働き方の改革以上に、今意味が感じられる、「本当に必要だね」と心から賛成できるような仕事をつくってゆかなければならない時代だと思う。つまり「どう働くか?」から、「どうやって生きてゆくか、営んでゆくか?」という、暮らしの形と仕事を組み立てなおしてゆくことに、自分もそうだし、人々の関心も移っていると思う。

「営み」は、仕事と暮らしの両方を含む包括的な言葉です。都市を離れる若い人たちは、その現場として直感的に中山間地を選んでいく気がします。

僕自身は、2年ほど前から徳島県神山町に移り住みました。半分以上の時間を神山で過ごし、あとは出張先と、実家のある東京にいます。

移り住んだきっかけは、9年前に町のNPOの方からもらった「ウェブサイトをつくりたい」という相談でした。この町では、当時既に9年ほどアーティストインレジデンス・プログラムが実施されていました。

毎年、海外から2組、国内から1組、計3組のアーティストが訪れて、地域に2か月ほど滞在しながら制作をし、その間に地域の学校で授業をしたり交流をしたり住民と関わり合って作品をつくる。いわば国際文化交流ですね。それを、驚くような低予算で積み重ねていた。参加アーティストの募集も無料ブログを利用して、それでも毎年100名を超える作家が集まっていた。しかし総務省の予算を得たので、自分たちのオリジナルのウェブサイトを作り直したいという相談をもらったんです。

このNPOの人たちがとても面白かった。半年かけてサイトをつくったのですが、みなさんと仲良くなって、それから年に1〜2回通うようになり、ある頃から「この人たちの近くで暮らして、もっといろんな時間を重

ねてみたい」と思うようになりました。

自分は東京生まれ東京育ちです。当時の自分は「東京以外に自分の拠点を持ちたい」と思っている自分が恥ずかしくて、誰にも言えずにいました。「ここではないどこか」というか、青い鳥幻想のような、場所をリセットすれば自分の人生の難しさが解決するような、そんな願いを持っていると見られるのが恥ずかしかったのだと思うし、実際にそんな自分を感じていたのかもしれない。

ウェブデザインの仕事で神山に通うようになって、移り住む先を探していることは慎重に隠していたのですが、通い始めて二年目の頃、「ここに家を建ててみたい」と思った土地があつて、そこで土地の交渉を始めてみたんです。でも、山の土地って難しいですね。商品化されていない。境界線認定ができていないどころか、相続もできていなかったりして。次の世代が使いたいのに、世界を使えないという現実があることを知りました。数年間待ったけれど結局まとまらず、建てるのでなく借りの方針に切り替えて、2014年にいまの大家さんに出会い、草と格闘する暮らしを始めました。



徳島県神山町

築120年ほどの古民家を手直ししながら、最初は東京でやっていた仕事をしていました。焦りはなかったけど、神山に移って、ここで自分は何をするんだろ

う?というのは考えてもよくわからなかった。でも1年くらい経った頃、町役場の人から「町のウェブサイトをリニューアルしたい」と声をかけてくれて、そのお手伝いをしました。その仕事を一緒にしながら、先方もこちらの仕事ぶりを見ていたのだと思います。2015年の春先に神山町も地方創生の戦略策定を進めるので、一緒に出来ないか?という相談をもらいました。「地方創生」という言葉は苦手で、あまり関わりたくなかったけれど、これは今やらないと後々後悔するなと思い、関わらせていただくことにしました。

創生戦略づくりの方法として多かったのは、協議会のような短期組織をつくって、口の字型に長机を並べた会議室に地域の各分野の役付きの方が並び、事務局が作った資料をめくりながら説明して「あとは事務局にご一任ください」と進んでゆくような形。あれをやっても発話が少なすぎるので意味がないと思い、「今回は子育て世代と働き盛り世代の未来を作る仕事だから」という事で、よりそこに近い年齢の人たちでワーキンググループをつくり、発言機会の多い小グループ形式でミーティングを進めました。あと、アイデアを出して「あとは役場でよろしく」ではなくて、「私がそれをします」という人と人の組み合わせができるような形を模索しました。

アイデアと、それに自分事として取り組む人々の組み合わせがいくつか生まれて、それを推進しようということになり、今年の春に一般社団法人「神山つなぐ公社」を町とつくり、私自身もそのメンバーの一人として働いています。

神山町は、吉野川の支流の鮎喰川にそって集落が連続する、谷あいの町です。その貴重な平野部に小学校や町営グラウンドがあり、役場があります。その一角に元中学校の寮があります。神山町は面積が広く、山手線の内側の三倍くらいあります。通学が大変なので、中学生は学校近くの寮に寄宿して、平日は歩いて中学校通い、週末は各家に帰る暮らしをしていた。でも子どもの数が減り、もう20年以上使われていない。

耐震基準を満たしていないので、そのまま活用することもできない。

神山町はメディアに出る機会が多いからか、移住希望者が多いです。でも他の中山間部と同じように、空いている家はあっても、貸してもらえる家が少ない。なので移り住んでくる人々を受け入れるためにも、家を建てる場所がないので町外に出てしまうような町の若い世代のためにも、住宅開発は大事なプロジェクトです。

建築には、環境共生型の住宅設計を数多く手がけてきた建築家に担当してもらいます。でもこの方が本格的に腕をふるうのは7月からで、ここまでの計画段階は、ランドスケープデザイナーの田瀬理夫さんが土地利用の基本方針について中心的な役割を担ってきました。

田瀬さんをご存知の方はあまりいないと思います。作品指向でないで、メディアで流布しにくいづくり手。でも、福岡の「アクロス」というビルをご存知の方はいるかもしれない。下が文化施設で上がオフィスで、表通りから見ると普通のビルなのですが、反対側にまわるとほとんど山のような緑化斜面になっています。完成して20年ほどになりますか。木々は育っていて、朝夕には山風・海風が生じています。

『ひとの居場所をつくる』という本は、田瀬さんのインタビューで構成されています。アクロスについて最初に驚いたのは、「撒水していない」というお話でした。散水装置は整っているのだけど、竣工検査で動かして以来一度も動かしてないという。つまり、ここに降る雨水だけで植物が自立するように設計されていて、実際そのように機能しているわけです。そんなことが出来るんだな、と。

寿命を比べたら、植物より建物の方が短い。コンクリートの寿命は法的には60年で木の方が圧倒的に長寿命です。なので、建物を壊すことになった時には、パレット単位で外して別の場所に移植できる設計にしているという話も聞きました。緑は十数年を経て、いろんな鳥が運んできた種も育ち、樹種は多様に増えているようです。自己成長できる状態になっている。

彼が、神山の集合住宅のために描いた基本的な計画図は、橋を渡って敷地に入ってきて、駐車場があり、ここが住宅地。2戸で1棟、3戸で1棟のテラスハウスが8棟並び、川辺に共有部がついている。全部で21戸の集合住宅地です。中山間地に、ちゃんと町の資産になる、将来世代が使い続けられる、新しい公営住宅を作ろうと思います。

竣工が始まるのはちょうど2年後くらい。一気に作らずに、何期かに分けて粛々とつくり、出来た棟から暫定利用申請をして住み始めていける形を考えています。

神山町でこれくらいの規模の開発をする場合、請けられる地域工務店がないので、これまでだと、徳島市の工務店が請けることが多かった。つまり町外に元請けが流れて、神山町の大工さんたちはその下請けになってしまうという構造があったんです。

でも一気に作らずに、1棟ずつ建ててゆく形なら町の大工さんたちでできる。寮の解体時には少し大きな音がするけれど、その後はトンカチと丸ノコの音が年がら年中ずっと聞こえてくるような、そんな情景を2年間生み出したい。

森づくりに限らず、中山間地や地方の仕事づくりにおける大事なテーマは、つまるところ地域内経済循環です。

買い物は8割がた町のお店でしていて、どうしても外でしか買えないものだけ通販で買ったりする人が多い町と、逆に8割がた隣町のショッピングモールに出かけて買い物をしていて、地域での買い物は2割くらいという人の多い町では、同じ1万円を使っても、街に残るお金は1順目で前者は8000円、後者は2000円。4順くらい繰り返すと、地域で使われたお金は、前者が3万3千円、後者は1万2千円となる。ここには2.4倍の経済効果の差があります。たとえば、前者は体内に血液が豊富で、それがしつかり循環している。後者では血が流れ出ていて、貧血気味になっている。たくさん稼いでいるのに、なんだか貧しいしシ

ンドイ。多くの中山間地が、そんな状況に陥っていると思います。

そんなわけで、地域の大工さんに力を発揮してもらおうと。また小学校の通学路に位置するので、登下校の子どもたちも、ハウスメーカーのそれとは違う大工さんの仕事や、家のつくりを眺める2年間をつくれるのは、地域内経済循環の話とは別にとても良い事だと思っています。

このプロジェクトでは、既存施設の解体ガラを、建材として再利用する試みも行います。鉄筋はリサイクル業者さんに払い下げて、砕いたコンクリートのガラは産業廃棄物として処理業者に出さず、粗いものと小さいものを敷地内で分別しておく。それを地盤のかさ上げに利用したり、集水トレンチの材料として活用する。地域にあるもので、地域の集合住宅をつくってゆく思想です。不必要に余所のものを取り寄せない。ガラもそうだし、建材もむろん町産材を使います。それが町にとっては、いまやあたり前のことではなくなっている現実があるのですが。地域にいる大工さんに働いてもらうし、緑地は地域性種苗で構成します。これは地域の農業高校と一緒に取り組みます。草刈り機や除草剤の働きの結果、中山間地でも外来種の方が勢力として残りやすい。そのただ中に、地域性種苗の保護区を、集合住宅づくりという形で実現しようとしている。

いまここでつくり出そうとしているのは、町を将来につなぐ集合住宅です。

たとえばいわゆる高層タワーマンションのような建築物は、残念ながら将来世代にとって負の資産になると思います。そういう物件に住んでいる方がいたら申し訳ないのですが、老朽化がまだ進んでいない現状においても、あまり社会性を持ち得ていない。「人がただ集まって住んでいるだけ」「土地が高度利用されて、住まいが集積しているだけ」で、住んでいる人同士の活動が生まれるように出来ているわけでもない。

神山のプロジェクトでは、ただの家の集積でなく、人々が集まって住むことでより嬉しい事や活動が生ま

れやすい集合住宅を作っていこうと話合っています。

アメリカのある集合住宅地には、家と家との境界に160種もの果実樹が植えられている。実がなる時期がずれるように意図されていて、住民は収穫しなくちゃいけないし、食べたりケーキを作ったり、おすそ分けが起こったり、「今年も生りましたね」みたいな何気ないやりとりの発生を意図的に設計している。

ただ家を建てるのは簡単です。人口を増やすのも難しいわけじゃない。でも、そうではなくて、一つの

集合住宅づくりを通じて、さまざまな形で地域の血行をよくすることが出来る。最初にお話した「意味が多く含まれている仕事をつくる」ことの一例として、集合住宅づくりの報告をしました。

ポイントは、「新しい組み合わせをつくる」ことで、いまそれを組み立てているところです。最近、街から森のほうへ移って暮らし始めた個人の報告でした。ありがとうございます。



西村 佳哲 (にしむら よしあき)

1964 年東京生まれ リビングワールド代表、プランニング・ディレクター、働き方研究家

武蔵野美術大学卒。つくる・書く・教える、三種類の仕事。

建築分野を経て、ウェブサイトやミュージアム展示物、公共 空間のメディアづくりなど、各種デザインプロジェクトの企画・制作ディレクションを重ねる。多摩美術大学、京都工芸繊維 大学 非常勤講師。徳島・神山町と東京の2拠点生活。

著書『いま、地方で生きるということ』(2011 ミシマ社)、『なんのための仕事?』(2012 河出書房新社)『人の居場所をつくる』(2013 筑 摩書房)など。

トークショー

「街から森をめざす若者、登場!」

仕事や生活などで「森とのつながり」「森に向かう道筋」「森を活かす方法」を、自らひらいている若い世代(20歳代から30歳代前半)に、実践する「森とのつながり方」「森へ向かう道筋づくり」「森を活かす方法」などについて、その楽しさ・苦勞・要望などを語っていただきました。

登壇者

飯野 秀平 大阪府池田市 さつきやま森のようちえん スタッフ(研修生)

大阪の【さつきやま森のようちえん】スタッフ。大学在学時から「森のようちえん」や「インタープリテーション」に興味を持ちつつ、山形でブナ林の樹洞性動物の調査・研究を行う。大学卒業後も“人と人、自然と人を結ぶコミュニティ創り”に関心を持ち、都内の造園会社に就職。その後東京環境工科専門学校に入学し、自然環境の保全や野生動物の保護管理などについて学ぶ。本校在学時に海外や日本各地の森林を訪れ、自然の素晴らしさや感動を伝えたいと思う。夢は人々を感動の地へと誘うエコツアーガイドになること!! 自然を身近に感じて貰える様に子ども達に囲まれ日々奮闘中。

岡田 原史 宮崎県西臼杵郡日之影町 自営業(食品加工など/旬果工房てらす)

千葉県市川市生まれ。都会の住宅街で育つが、両親の影響でアウトドア活動が好きになる。環境問題を学ぶために東京農業大学に進学。日本の田舎、農林業を中心にした生活に憧れるようになり、大学卒業後は1年間の農山村体験プログラム「緑のふるさと協力隊」に参加。宮崎県日之影町に派遣されることに。最初はあまりの山深さに驚き、不安を感じる。しかし、1年間の生活を通じて山村の自然、伝統文化、人とのつながりに心動かされ、活動終了後もこの地に残ることを決意。町役場の嘱託職員を6年間勤め、現在は独立し地域の旬の素材を使い、無添加、手作りの加工品の開発・販売に取り組む。日之影町に隠れた魅力ある素材に光をあてるという意味をこめて屋号を「旬果工房てらす」と命名した。

佐竹 麗子 東京都立川市 正プラス・営業企画部

現在、岐阜県の飛騨高山の樹木からとれたアロマの会社、正プラスに勤めており、今年の5月で1年になります。もともと、中国上海に13年間住んでいました。高校生のころから森林に興味を持っていて、木を眺めていると、どこか落ち着く気分になり、森林にかかわる仕事をしよう!また、勉強しよう! と思ったのもその頃からです。今後は、日本の森の良さを日本だけでなく、世界に広げていきたいと考えていますし、森林にかかわらず面白い事をどんどんやっていきたいと思っています。

遅塚 真美子 静岡県富士宮市 介護職員及び NPO法人森の蘇りスタッフ兼 主婦

1990年埼玉県大宮市生まれ、山とはほど遠い環境で育つ。大学受験を機に日本の森林に興味を持ち、東京農業大学森林総合科学科に入学。3年生の時に、女性や子どもも参加できる皮むき間伐(きらめ樹)に出会い感銘を受ける。皮むき間伐を広めているNPO法人 森の蘇りに取材し、卒業論文にまとめる。卒業後、森の蘇りで働くため静岡県富士宮市に単身移住。現在、高齢者施設で働きながら、森の蘇りのスタッフとしてHP管理やイベント運営に携わっている。

鳥居 由佳 奈良県吉野郡川上村 川上村集落支援員

1982年、大阪府東大阪市生まれ。大阪樟蔭女子大学卒業後、事務職員として勤務しながら森林ボランティア団体に所属。2013年6月より「川上村地域おこし協力隊員」となり、奈良県吉野郡川上村に移住。川上村では、主に林業振興を担当。伐採現場を見学するツアーやイベントの企画・運営や、県外でのPRイベントにも多数参加。また、全国の講演活動を含め、積極的にメディアにも出演し、山への想いを伝える活動に取り組む。2016年3月に地域おこし協力隊の任期を終えたのち、現在は「川上村集落支援員」として、川上村を拠点に林業振興活動を継続中。

南橋 茜 群馬県利根郡川場村 利根沼田森林組合作業員

1992年生まれ。神奈川県横浜市出身。東京農業大学地域環境科学部森林総合科学科森林政策学研究室を卒業後、利根沼田森林組合に籍を置き現在に至る。世田谷区と群馬県川場村の交流事業の一環である里山自然学校に大学1年生の時からスタッフとして参加する。仕事の中で山の管理することの大変さや自らの体力のなさを痛感し、それらを乗り越えるべく周りの先輩方に助けをもらいながら奮闘する毎日を送る。目下の楽しみは毎日の温泉。

コメンテーター

東京農業大学教授

宮林 茂幸

リビングワールド代表 働き方研究家

西村 佳哲

哲学者

「2016 森林と市民を結ぶ全国の集い in 東京」

実行委員長

内山 節



宮林さん、西村さん、内山さん（左から）

進 行

(一社)モア・トゥリーズ 事務局長

水谷 伸吉





6人の自己紹介

水谷 本日は「街から森をめざす若者」をテーマに6人の方にご登壇いただきました。コメンテーターの三方には先輩として、随時ご意見やアドバイスなどをしていただければと思います。

仕事や生活などで森とのつながりや、森に向かう道すじ、森を活かす方法という点で、自ら道を切り開いている若い世代にご登壇をいただきました。実践している内容についてや、その楽しさ、苦勞、要望など、というふうにプログラムには書いてあります。ただ、シンポジウム形式ですと、どこか形式ばってしまうところがあります。今日は○×の札を用意しています。中盤からは、僕の方から質問を投げかけ「○」「×」で答えていただければと思います。質問内容によってはコメンテーターも、ご自分も答えたいという場合には「○×」と言っただいただければと思います。

時間があれば、会場からの発言や質問なども取りた

いと思います。よろしくお願いします。

ちよつとだけ私の自己紹介をさせていただきます。全国の集いの実行委員として、前々回の東京開催から実行委員会に関わっています。本業は「一般社団法人モア・トゥリーズ」という森林保全の団体をやっています、主に、いろんなデザイナーと一緒にプロダクトの開発をしてその製品を作っています。また、都会の方に森林に関心を持ってもらうワークショップを開き、都市と森をつなぐことをやっています。今日の皆さまは、山側に軸足を置いて、いろいろ体験されていると思いますので、そんなお話を聞きたいと思っています。

それでは、最初はみなさんから、一人ずつ自己紹介と活動紹介プラス地域の紹介をお願いいたします。



佐竹さん、岡田さん、飯野さん(左から)

飯野 大阪府池田市の「さつきやま森の幼稚園」でスタッフをしています。

最近「森の幼稚園」という言葉をしばしば聞くと思うんですけど、野外に子どもたちを連れて行って、野外教育という形で一日子どもたちを外で遊ばせて、自然の中でいろんなことを学んでもらう保育の活動です。

「さつき山」は、都心に近い里山的なところで、大阪の梅田から30分くらいで行けるところで、里山的な、ちょっと昔ながらの商店街があったりとか、ちょっとした小高い山とか川や畑が広がっています。

私は少し前からラフティングのガイドを週末にやっています。川を下っていると森が見えてきます。川から見る景色、また畑から見る森の景色、それから山の中に入ったときの森の景色、その自然の違いみたいなものを子どもたちは敏感に五感を使って感じていると思います。

そのような子どもたちを見ながら「どんなふうに感じているのかな」というのを日々私は感じながら「森を活かす」というか、どちらかというと「私は森に生かされているな」と感じる時が多いですね。

水谷 ありがとうございます。先ほど、初めてみなさんと顔合わせをして打ち合わせをしたんですけど、埼玉出身で大学が山形そして今は大阪ですね。

飯野 そうです。一回東京で造園の会社に勤めていたので、その時は結構都心に近いところでした。

水谷 「森に生かされている」とは、かなり達観していますけれども。

飯野 大学のときは、森林生態系というものを調べていたので、森にずっと入っているような形だったのです。就職して都市部の高層ビルが建っているようなところの植栽を担当していましたが、そのとき、もっと緑の豊かなところで生活したいなと思って、専門学校に入り、エコツアーガイドの方のところに弟子入りし、現在のようになっています。

岡田 宮崎県日之影町から来ました。出身は千葉県市川市です。「緑のふるさと協力隊」という1年間の農山村体験プログラムに参加して日之影に行きました。最初町に行ったとき、ものすごい高度差があって、道がジェットコースターじゃないかというくらい驚きました。

緑の協力隊として1年間過ごし、その後「もう少しこの地域に暮らしてみたいな」という思いがあり、しばらく集落支援員という役場の嘱託職員をしていました。その仕事をしているうちに、この地域の伝統文化だったりとか、いろんな農産物だったりとか、自然に惚れ込んで「ここでずっと生活していこう」という気持ちになってきました。

今年4月に役場の仕事を辞めまして「旬果工房てらす」という屋号で事業を開始しました。栗、ゆず、金柑、梅、すもも、山桃、甘夏という果物が日之影町では採れます。「これを組み合わせて行ったら1年間を通じて何かしらの商品が作れるんじゃないか」と思い、こういう事業をやることを考えました。

今年の年間売上はですね、最初の初年度なので200万円くらいで予想してやっています。まだ始めたばかりで、正直貯金をどんどん使っているという状況です。こういうことをしながら町で暮らしていきたいと思っています。

幸い、新聞やテレビなどで取り上げてもらえる機会が増えてきました。本当にありがたいことに地域の人からも協力してもらったりしていて、「頑張らなければ」という気持ちです。楽しく充実した毎日を送っています。

水谷 岡田さんは千葉県市川市生まれですが、宮崎

には縁があったのですか？

岡田 いえ、全く。それまでは九州にも行ったことはないという・・・。

水谷 初九州で日之影に行った？

岡田 延岡からバスに乗って川沿いをどんどん山に入っていくと、どんどん山が狭まってくるんですね。「これはどこまで行くんだらうか」というような思いでした。そして、着いたら急傾斜な山肌に集落が点在していて、あそこの集落に行くのに山をいくつも越えていくといった景観でした。そういう山村という地域をそれまで全く知らなかったのが驚きました。けれど、そこに面白さというものを感じました。

佐竹 この写真は岐阜県の飛騨高山の山奥にある本社です。今日は「ここから来ました」と言いたいのですが、実際は東京の千駄ヶ谷にある「正プラス」という、いまアロマの製造をしている会社で勤めています。



稲本正をご存知の方はいらっしゃいますか？。オークヴィレッジという木工の会社を立ち上げた稲本正が社長をしているアロマの会社です。

そもそも「アロマが何か」というと、小瓶に入っている精油のことなんですね。うちの会社では、原材料が森の枝葉から採られた、その枝葉を使って香りを抽出して、アロマをつくって販売しています。

すみません、会社の説明会みたいな(笑)ことばかり話しているんですけども。私がなぜこの「正プラス」という会社に入ったのかといいますと、「東京林業女子会」という団体で森林活動をしていました。そこで、ある方

の紹介で稲本と会って、もともと林業に興味はあったんですけど、その林業の中でも新しいビジネスモデルを作っている、いわゆる使われない間伐材の枝葉を使ってアロマを作っているという新しいビジネスに惹かれて会社に入りました。



南橋さん、鳥居さん、遅塚さん(左から)

遅塚 静岡県の富士宮市から参りました、NPO 法人「森の蘇り」の遅塚です。

富士宮市といえば「富士宮焼そば」が有名ですけど、もともと私は埼玉県大宮市に生まれまして、周りは住宅街で木や森とは全く縁のない環境で育ちました。自然といえば公園だったりとか、山は夏休みに遊びに行くところというイメージでした。そんな私がなぜ富士宮市に移住して、NPO 法人森の蘇りで活動しているのかと言うと、きっかけは2つあります。

ひとつは大学受験の時に、私は環境問題にすごく興味があったんですけども、環境問題と一口に言ってもテーマが広くて、それを大学で学んだ先に何かできるのかなというのが見えなくて、悩んでいたときに、本で日本の森林の問題について読みました。日本の森林の問題なら、すごく身近にあるんじゃないかという印象だったので、それを学んだ後に何かできそうだなと思って大学を探しました。そして東京農業大学に入学したのがひとつ目のきっかけです。

もう一つは、NPO 法人 森の蘇りとの出会いです。東京のイベントで、森の蘇りの代表のお話を聞いて感銘を受けたんですね。大学の授業で学んでいた日本

トークショー 「街から森をめざす若者、登場!」

の森林の現状や厳しい林業の現状の話と違って、森の間伐作業で、女性や子どもたちが笑顔で、森の中で作業をしているのが新鮮な驚きでした。私もこれやりたいと思い、富士宮市に移住することを決めました。



NPO法人森の蘇りで行っている活動が「きらめき」という間伐方法です。スライドに映っているように「レゾ、きらめき!」という掛け声と共に、木の皮を一斉に上まで皆でむくんです。4月から8月の、木が水分を吸い上げる時期に木の皮がむきやすくなるので、その時期に木の皮をむきます。

スギやヒノキの人工林は、密度濃く植えられているので、木が育つと光が全然森の中に入ってくなくなってしまう。「きらめき」をしてあげると、木の皮をむくだけで木の葉っぱが落ちるので、森の中に光が届くようになります。それで、植物が増えますね。1年で23種類の植物の数が、2年目で53種類、3年目で76種類まで増えたというデータもあるくらいです。森の中に植物が増えると、鳥や虫とか動物たちがやってきて、森がとても賑やかで豊かな森になっていきます。

木の皮をむいた後に、左上が伐採して、右上が製材、左下が加工、右下がフローリングとして板を貼っているという写真です。水分が抜けた丸太というのはとても軽くてですね、2m材を女の人が一人で担ぎ上げることができるというくらいに軽くなります。製材加工をしてフローリングまで。木工製品も作っていて、柵とかも勿論なんですけど、丸太の木の皮をむいた外側の部分を「丸壁君」という商品にしたりとか、おがくずを薪ストーブの着火材にしたり、最後に残った材はよく

乾燥しているの薪として使えたりとか、本当に木を余すことなく使えるというところに魅力を感じているところです。

私はいまNPO法人のスタッフとして働いているんですけども、それだけだとやっぱり生計を成り立たせることが難しいので、週4日ほど介護職員として働きながら活動しています。

鳥居 奈良県吉野郡川上村から来ました。村に行つて、6月で3年目です。初めは、「地域おこし協力隊」という総務省の制度で林業に関わる活動をしていました。その後も集落支援員という形で村に住みながら林業の振興をしています。

私は、以前は大阪で学校職員をしていて、海が好きで「海を守るためにできることは何だろう」と思っていました。そして、できることは林業じゃないかと思いネットで「林業」と検索したのがはじまりでした。

森林ボランティアから始まり、素人感覚でずっと山に関わっていたのですが、川上村は吉野杉の産地で、そこに住んで感動することばかりでした。それなのに、一般の人の多くは木はどこで売っているかも知らない。それならば「全部自分でやってみよう」と思い、原木丸太を一本買い「お杉」と名付けました。そうこうしているうちに、ヤフーニュースに載り、フェイスブックのシェアが2万2000件にもなりました。



今日も何人か声をかけてくださったのですが「丸太の人や」とか「丸太の女や」というのを、いろんなところの人に言われるようになりました(笑)。ウェブ上

でも「お杉を買った女」と上がっていたので、これで行こうかなと最近思っています(笑)。

この材は、値段のことも取り上げられたのですが、私は高いとか安いとかそういうことで買ったのではなくて、自分のペットみたいに原木を手元に置いておきたいなと思って購入して、自分で皮をむいて、製材はしてもらって、自宅で天然乾燥をしました。それが右下の「お杉が一本、これだけの量」というものです。

「お杉」がどうなったかという、みなさんが手を加えて、村長も一緒にノコを引いてくれて、丸太からカウンターバーを作ってみんなで酒を飲もうということを考えました。吉野杉は酒樽のために育てられた材料なので、その材のところでみんなでお酒を飲めたら面白いなと思ったのがきっかけです。

みんなから「ピーコはいつや」といわれていたこともあり、この3月に110年くらいヒノキを購入して、先日製材して、いま半分に割った状態です。こういう情報発信を定期的に個人のフェイスブックでしています。毎回350以上シェアがあり注目度のある記事になっています。

こういうトラックの写真とか、世の中に出回することは今までありませんでした。私は人のハートをまず掴みに行き、仲良くなって山での撮影をし、伐採を撮影し、それを持ってバラエティ番組に出たり、そういうことを続けながら「山を守ることとは水を育むことです」と伝え続けているのが現在の活動です。

水谷 「お杉」記事を読んだときは衝撃が走ったのですけど「あ、意外と安いんだ」という反応でしたよね。手が届く価格だという。

鳥居 そうですね。意外というよりも「ものすごく安い」というのが一般の人の感覚で、これを値段を知らせずに一般の方に見せると、大体安くて10万円、50万円、100万円、500万円と言う方も沢山いらっしゃる。いかに山側と町側がまったくつながっていない状態で、ひたすら「木が売れない」と言っている状態かを強く感じます。

1本の木にはストーリーがあります。自分の買った「お杉」、そして「ピーコ」は、この木を切ると決めた人、切っ

た人、運んだ人、市場で鈴を振った人、すべての人のストーリーを私は知っています。そこがやっぱり皆の一番知りたいところであって、すごく価値のあるものだなと思っています。

南橋 利根沼田森林組合の南橋です。群馬県川場村から来ました。この東京農業大学を一昨年に卒業しました。

見た目から「本当に作業員やっているのか」とよく言われます(笑)。みんなより食べることが好きだからこそ、町の人が私に面白がって食べさせてくれる(笑)

私が住み仕事をしている川場村は、人口が3898人、面積が85.295km²、森林率が約80%を越えています。標高が約500mあって、そのくらいがちょうど作物がよく育つ標高で、リンゴ、ブルーベリー、コンニャク、米、その他いろんな野菜がつくられています。



利根沼田森林組合は、管理している地域が11万5439haあります。朝「今日の仕事はどこだろう?」と事務所に行くと、今日は端っこあたり、今日は上側だ、今日は下側だ、と管理する場所が点々としています。

職員は41人で、事務会計、木工品を作っている「ミニズク工房」職員、そして実際に木を切ったり山に入って仕事をする作業員がいます。その41人の中で女性が4人いて、そのうち作業員をやっているのは私一人です。ただし、いまは全日、一週間を通して作業員ではなくて、期間限定で二日間だけ田園プラザにある木工品のお店で店番もしています。

普段作業員としては「造林部門」で仕事をしていません。植えた木を育てる部門です。春夏秋冬でやること

が変わっていき、春は苗を植えるための地面を耕す「地ごしらえ」、苗を手で植え付ける「植付け」。夏は「下刈り」、秋冬だと「間伐」、「枝打ち」もあります。その他にも宅地近くの危険木伐採や、害獣と害虫の駆除対策などもあります。まだまだ半人前にもならないくらいで、これから頑張っていこうと思っています。

移住して良かった?

水谷 これからはこちらの方でご用意した質問に沿って、この〇×札を使って、ぶっちゃけた話もしながらお答えいただきたいと思います。

では一つめの質問です。『移住して良かったと思っている』。コメンテーターのお三方も、例えば2拠点にして良かったと思われた場合は出してください。岡田さんは〇ですね。

岡田 今まで地元や都会では味わえないような体験をできている、また自然と共に暮らしているという形がすごい自分に合っていると感じています。

水谷 「緑のふるさと協力隊」の任期は1年ですよ。やっぱり1年の中で、こうどっぷり魅了された感じですか?

岡田 1年間という期限付きなんですけど、その中で季節を感じて、その空気感と生活を体験できたというのは大きいですね。

水谷 それでは、同じく〇をあげた遅塚さん。

遅塚 外に出てみて初めて地元の人以外の人と関わりを持つ、NPO関係の森の方と出会うという経験ができたというのが一番私にとって良かったなと思っています。駅の周りはイオンがあったり商店街があったり、地方都市という感じですけど、私の住んでいるところはそこから一山越えたところにあって、家がぼつぼつあるような里山的なところですね。

水谷 では、村にお住まいのお二方。鳥居さん、〇の理由をお聞かせください。

鳥居 私は田舎暮らしは全然希望ではありませんでした。田舎とか都会とか特にどこに暮らすという区切りもなく、私はふるさとの東大阪市が大好きなので、特に東大阪を出たいという気持ちもなかったんです。

ただ、林業をしようと思った時に、私はほとんど林業に対する知識がなかった。「どうしたら早く学べるだろう」ということを考えて、林業大学校とか緑の雇用制度とかいろいろ調べたんですけど、住むのが一番早いと思い「地域起こし協力隊」制度を利用したというかたちです。村民の懐に入っていったらいろんなことが早く分かるんじゃないかと思いました。で、今4年目ですけど「もう10年くらいおるような」と村の方から言ってもらえるようなありがたい環境です。それと村の人ってどれだけお金を積まれても嫌なものは絶対嫌なんですよ。でも、私だから「いいよ」と言ってくれることはたくさんある。その意味でも移住して良かったなと感じています。

水谷 懐に飛びこんで、ディープな生活を送っている。

鳥居 そうですね、ご飯とかもみんな、たぶん本当に自分の孫みたいな感じで、親のように心配してくれる人がたくさんいます。

水谷 南橋さんは川場村に移住しているわけですが、いかがですか?

南橋 1年少しで「移住して良かった」と言っているのかなと思ったんですけど、まだ村のことはよく分からないというのがホンネです。ただ、帰ったら家のドアの所にトマトが置いてあったり、そういう温かさは感じています。尋ねなくても「これは大丈夫か?」と、いち早く聞いてくれる、本当に親がいつぱいいるみたいな感じですよ。

水谷 飯野さんもどちらかと言うと遅塚さんに近い、ちょっと里山的な場所だと思うのですが。

飯野 そうですね。去年まで専門学校で自然環境の保全とか、野生動物保護の勉強をしていましたが、その卒業生でエコツアーガイドをされている方がいて、そのエコツアーガイド兼森の幼稚園の園長の卒業生のところに行きまして、インターンになったのがきっかけです。

毎日フィールドに出て、自然を相手に、子どもたちもいるので、その中でいろんなハプニングが起こるんですけど、その中で自分が試されている感覚がすごくあるんです。けれど、それを乗り越えて行く楽しさがあり

ます。

週末は京都でラフティングのガイドを週末にやっていて、ダブルワークのような形です。週の前半を大阪で、後半は京都で生活をします。「移住して良かった」と思っています。

東京は嫌い?

水谷 みなさん、やっぱり移住に対してとっても前向きだなというのが共通していると思いました。

では、次は『ぶっちゃけ東京は嫌いだ』。遠慮なくいっちゃいましょう。ちょっと微妙な反応をされたお二人。南橋さん、嫌いではないけど?

南橋 嫌いではないけど好きではない。好きではないと言うより適応できなくなっている(笑)。

水谷 好きではないけど、川場村の生活に慣れてしまったわけですね。たまに東京に来ると、じゃあ今日にしてもちょっと「アウェイ感」がありますか?この会場(東京農業大学)は母校ですけど。

南橋 以前は人の流れを見ながら歩いて、ここを行けばあのビルに行けるぞという感覚だったんです。けれど、今は行きたいビルを横目に見ながら人波に流されて別のところに行ってしまう(笑)

水谷 サーフィンみたいです(笑)

南橋 「嫌い」と言うより、人ごみの中で生きて行けるのが不安という感じです。嫌いというより苦手です。

水谷 1年でそれだけライフスタイルが変わるというのは素敵なことだと思います。

水谷 鳥居さんは△ですね。

鳥居 私は大阪人なので、東京は分からへんなという意味がひとつ。大阪は嫌いかわれれば「めっちゃ好きです」と答えますけど、東京にはたまに来たら楽しいかなという感じですね。人がいっぱいおって「いいなあ」と思いますね。あと安心感で言うと大阪育ちなので、知らない人、みんな知らない人だから嬉しいという感覚になります。村にいと常に挨拶をしていたり、車に乗っていても「今どこどこを走ってたやろ」と電話がかかって来たり、「今お前のナンバー見かけた」み

たいな、どこ見て走ってるの?(笑)と思うくらいみんな私を見てる。東京とか大阪の都会の人が多いところにいると「素晴らしいな」というのがあります。

村は人口が1500人を切っています。消滅都市でも全国トップ2までも登り詰めている場所です。スクランブル交差点で若い人がたくさん通るのを見て、ごそつと網で連れて帰りたいな(笑)と、そういう妄想をします。都会は素晴らしいなというのは人の多さですね。

水谷 そういうちょっと俯瞰した目で見ると楽しめるということですね。

鳥居 そうですね、この中にいっぱい知恵が詰まっているならちょっと欲しいなとか、若い人が同世代でいたら夜の飲み会楽しいだろうな、という些細なレベルの話ですけど、人が多いというのも少ないところから見ると「いいな」と、ないものねだりだと思います。

水谷 では「東京は嫌いだ」で○にした人。男性二人ですよ。

岡田 そうですね、ちょっと窮屈感が拭えなくて。両親がアウトドアスポーツ好きだったこともあって、小さい頃から自然の中にでかける機会が多くありました。そして、田舎の方が自分に合っているんじゃないかと思っていました。実際行ってみて、やっぱりそうだなと思いました。

水谷 いまでも市川市にご実家はあるんですか?たまに帰省で帰ったりします?

岡田 はい。たまに来るといいところです。しばらくいると窮屈になって来ます。

水谷 飯野さんも東京は嫌いと。

飯野 そうですね、東京で仕事をしていたこともありまして、去年までは2年間通っていました。東京は何でもありすぎるというか、仕事をしていても「僕じゃなくてもいいんじゃないか」という感覚があって、でも地方に行くとなんと人のつながりというのをすごく感じるし、あとは自然の中に身を置くということの危なさというか、逆に楽しさとかをすごく感じられて、わくわくしたり、逆にほっとする感覚があるんです。

水谷 僕もサラリーマンをやっているときに、上司に「お前の代わりはいくらでもいる」と言われたことがありま

したねえ(笑)。「働き方」というテーマで西村さんにお話を振りたいんですけど。西村さんは今の設問のお答えは?

西村 東京生まれの東京育ちですからね、東京は好きです。東京で一番好きな時期は、お盆と正月(笑)みんな故郷などに帰っていて静かで、その時が好きですけれど。東京もひとつの地方ですから、そういう意味では自分の生まれ育った場所は好きです。

水谷 宮林先生は○でしたね。

宮林 そうですね、私は信州の田舎から東京を目がけて出て来たので、田舎を捨てた男なんです(笑)。ふるさとはおつかないおばあさんやおせっかいなおじさんが沢山おり、悪戯をするとすぐに村中にその噂が広がっていたり、色々なしきたりがあつて煩わしく感じていました。ところが、東京は意外と冷たく、面倒なルールがあつて、かえって煩わしさというのは東京の方があると感じています。それからもう一つは、これもどちらかという煩わしさかもしれませんが、いかがわしい誘いが大変多いということです。悪しきにつけ良きにつけ。いろいろなお誘いが。多様性に富んでここまであるのはさすがは東京ではないかなと。朝この大学に来るときは2時間で来るんですけど、帰りは8時間以上かかる。多様な誘いがあるんですね。全部応えていると朝になってしまう(笑)

ただ、同じようにお盆と正月は好きです、帰省ラッシュなどでほとんど人がいなくなってしまう。そういう静かな東京は好きです。しかし、コンビニに行ってもあまり品物がありません。電車もいつでも座れるし、街中を人混みに揉まれないで済む、そういうところは何となく滑稽で好きですね。これもまたいいじゃないかと。そういう簡素なところは好きですけど、誘いが多いところはたまらないないです(笑)。

水谷 ありがとうございます。ちなみに僕も東京生まれの東京育ちで「実家に帰らせてもらいます」という言葉が言えないという環境です。

では次に『なんだかんだ言っただけ東京のカルチャーは気になる』。全員○ですね。遅塚さん。気になりますか?

遅塚 いろんなイベントがあり、興味ある分野の催しが東京で開催されることが多いので気になります。家にテレビがないので、主にネットで情報を見たりしています。

水谷 今日のシンポジウムも東京開催ということで、2年に1回、地方と東京とを交互でやっていますが、東京開催のシンポジウムが多いというのは客観的にも思っています。

スローライフしていますか?

水谷 次はご自身の生活について。『スローライフを満喫しているかどうか』。全員×ですね。鳥居さん、全然スローライフじゃないぞと。



鳥居 はい、住み始めたその日から何とハードな毎日なんだ(笑)という。本当に大阪で働いていた方がよっぽど楽だったなと思ったくらいハードでしたね。でも自分でハードにしたこともあるんですけど、朝から晩まで村の人に会う、24時間スイッチオンという感じでした。

水谷 ゆっくり自然に囲まれてのびのびという訳ではなく、意外と忙しかったということですね。

鳥居 そうですね、山は目の前にあるんですけど、なんか大阪にいるときより長時間パソコンを見ている(笑)気がします。

水谷 佐竹さん。ちょっと急に振られちゃったけど、どうですか?田舎暮らしという意味でなくても、今の仕事はどうですか?

佐竹 全然スローライフじゃないですね。本当に朝から晩までオフィスに行ってパソコンをカタカタやって働いている感じです。まだ小さな会社で、まだまだ成長途中のようなところがあるものですから。

水谷 今度はライフスタイルで行きましようかね。『うちは薪ストーブだ』。〇の方がいない。ちょっと意外ですね。

南橋 アパート暮らしなので、薪ストーブをやったら燃えてしまう(笑)。事務所は薪ストーブです。「薪ストーブいいな」と見ながら私は電気ストーブです。

水谷 住宅事情もあるんですよね。ちなみに岡田さんのお住まいは古民家、それとも公営住宅ですか？

岡田 古民家ではないんですけど、もともと町営住宅の平屋の一軒家です。

水谷 じゃあ本気を出せば、薪ストーブ入れられちゃう？

岡田 そうですね、薪ストーブは夢ですね。いつかは持ちたいです。

水谷 あ、何でこういう質問をしたのかというと明日の分科会は5つに分かれていて、その中の一つに「エネルギー」という分科会があります。そして「デザイン」というテーマの分科会もあります。基調講演をされた西村さんのテーマも明日に通ずると思いますし、明日の分科会もある程度意識をしながら、みなさんとの交流、みなさんのトークを聞いていただけたらなという意味でした。

さて次はちょっといじわるな質問ですが、『今の生活に不満がある』。鳥居さん、楽しそうなお話をお聞きましたけど。でも不満はある。

鳥居 そうですね、なんか不安定な状態でやっていることもあるんですけど、なかなか仲間も増えない中で、どこまでこんな感じなのかな、と弱気になる時もあります。

水谷 そこは日頃は見せないけれども、ちょっとモヤモヤもある。

鳥居 そうですね、川上村は田んぼが一枚もない山村なんです。林業だけで生きて来たという村なので、本当にこれからも林業で行くんかどうかというのもでも分からない状態で、本気にならへんのやったら私は本気

の人たちと組んで本気でやりたい。そんな思いも全部ぶつけてます。なんか皆ぬるいんですよ。なんか皆文句だけ言ってるんですよ。なんかそれが嫌で、今の状態が不満と言うか、嫌やったら嫌と言え、好きやったら好きと言えという、どっちつかずの感じの人が、ひとこと目に「山はアカン、林業はアカンよね」って言うんです。

私は、絶対林業でやっていける、やってやると思っているんですけど、なんかみんなのその不安が伝染すると言うか、言い切ってやりきって本気で取り組んで欲しいなというのがあります。

水谷 そういう人たちが広がっていくといいですね。飯野さん、実質いまの生活は3ヶ月くらいですかね。

飯野 そうですね、僕は別に不満はないです。幼稚園の方針が「今やりたいことが一番目」というのが、うちの園のキーワードになっているんですけど、やりたいことは全力でやると。「できなくても自己責任でしょ」というのが、子どもがすごいそれをやってて、スタッフが何かを我慢してたりするとすぐそれが伝わっちゃって、そうすると「何でやりたくないことをやってる」みたいな感じになるのが変なので、やりたくないんだったらやらなければいい、でもそれは自分がやらないというのを決めたんだから「やらないのを選んでるでしょ」みたいな感じで。皆すごく一見厳しいように見えますけど、皆がやりたいことを一所懸命やっていて、それを助けてくれる人たちが周りにいるという環境なので、それはやりたいことを一所懸命やると頑張らなければならないところは絶対頑張らなければいけない。結構大変なところもあるんですけど、でもそこで自分が決めたことをやり通せることが幸せだなと思っているので、今の幼稚園のその方針がすごく僕は満足していますし、これからもどんどんやりたいことを追求して行きたいなと思っています。

水谷 飯野さんの目ってキラキラしてるんですよね。

飯野 僕の性質的に子どもっぽいらしいんで、やりたいことは好奇心旺盛でがつつやる人間みたいです。

水谷 2拠点生活をいち早くされてきた内山先生、いかがでしょうか。

内山 元々あまり不満ってものがないんですね。大抵何でも馴染んじゃうんで。ただ、今の暮らしはいいことはいいですね。

さきほどの吉野の話ですが、吉野林業って奈良とかあっちの方のお金持ちに山を持たせて、自分たちは山守になって、で、いつの間にか貯め込んでいるんですね(笑)。その点では、実にしたたかに生きて来たのが吉野林業です。ですからやる気がないような、あるようなコメントというのも、その通りなのかなと。相当したたかなのかなと(笑)。観察してみてください。

水谷 宮林先生、いろいろ教え子と言うか学生さんで、例えば多摩川源流大学の小菅に移住された方とか、いろんなお話が耳に入ってくると思うんですけど。

宮林 そうですね、源流大学では、卒業した人が6人住み着いています。結婚した夫婦もいますけど、それで子どもが産まれました。久しぶりの産声に、村中がえらく喜んでいまして、毎日子どものところにおばあちゃんたちが来ているんです(笑)。これからの展開が大変楽しみです。

そのような中で、田舎の「暮らし」を見ると、暖かな地域文化があって、豊かさとか安心とか安全とかというハートの面は結構満喫しているんだろうと思うんですけど、ただ経済、所得ベースになって来ると中々大変なのかなと。村のコミュニティに慣れ、その中にきちんと融合すると、かえって住みやすく、楽しい生活を、暮らしぶりに見えます。ただその中にはかなりしたたかな人もいますので、お互いに気づかい、いたわりのコミュニティがバランスを取っていくのではないかと思います。

私は普段の暮らしというものについて、いま不満なのはですね、一週間飲み続けて帰ってたら、大事な盆栽が蛾の幼虫に喰われちゃってたんす。これがものすごくショックでした(笑)。

水谷 だから家に着くまで8時間かかってしまうんですね。なんか満更でもないような気がしますけれども(笑)。

ではここで、会場の皆さまからもご意見やご質問、挙手をいただきたいと思うのですがいかがでしょうか？

質問者 楽しくお話を聞かせていただきました。僕は今年50歳です。この世界に関わらせていただいて20年くらいになります。僕らの年代の役割って何なんだろうかということを感じながら、ここに来ました。それがひとつ。

もう一つは、このままでいくと、確かに若い方々が地域に入って頑張っていっていらっしゃる方々がいるんだけど、ひとつ間違ったら要はシステムに乗りたくないから地域に行ったのかということで終わりになりかねないのかなと。それはどっかでシステムとして、みなさんの頑張りを引き受ける必要があるのかな。僕的にはそれが五十代の役割なのか、と感じるんですけど、何かコメンテーターの方々に教えていただければなと思いました。

水谷 だいたい50歳くらいの世代の方々が、森林もしくは森林ボランティアという世界の領域でどのような役割を、若者の方から期待されているかという解釈でよろしいでしょうか。

岡田さん、日之影で50歳くらいの方々をイメージして、どんなことを期待していますか？

岡田 人生の先輩として教えてもらうことも沢山ありますし、僕もそういう40歳から60歳代のみなさんからいろいろ教わっています。「何かをやろう」という若い人たちを応援してくれる人たちが周りにいたので、それが僕がこうしていられる力になっていると感じています。

水谷 南橋さん、森林組合でも50歳代の職場の先輩がいらっしゃると思うんですけど、期待していることはありますか？

南橋 「期待している」なんて偉そうなことは言えないんですけど、うちの組合は比較的年齢層が若くて、他の森林組合だと大体50から60歳代さらに70歳代がいらっしゃることも多いんですけど、うちの組合は37歳が平均年齢です。その中でお父さんの立場の方々がだいたい50から60歳代の方。その方々がいるから活動が締まるし、そういう方々がいないと成り立っていかない、キーパーソンだと思っています。

水谷 内山先生、「集い」の実行委員長として、森林ボランティア活動の変遷も見て来たと思います。森林

ボランティアの形も変わり時代も変わって来つつある中で、いま若い方も森林に目を向けているのに対して、上の世代のありかたについてお話してください。

内山 いろんな技を持っている人たちには、教えることがいっぱいあると思います。それは、例えば木を伐るとかそういう技だけじゃなくて、何か問題が起きたときに上手にそれを収めていく技もある。

ただ、そういうものを持っている人たちはそうやっていけば良いのかも知れません。ただ、上の世代は、これまでいろんなことを言っ、いろんなことをやってきたけれども、とどのつまり、もう若い人たちに相当犠牲を強いる時代に来ている。それは大学でもそうかと思えますけど、東京農大は人気があるので大丈夫かもしれないけれど、多くの大学は、これからどう見たって経営が成り立たなくなる時代です。そうすると何の責任も取らずに、今までの大学の先生たちが勝手にリタイアして年金生活に入ってしまうと。そのあとの残った先生も学生さんもエライ目にあう。そういう意味でかなり無責任な仕組みを作っちゃっていて、別に僕が個人的にそういうことを作った訳ではないけれども、社会全体としては国債の問題から何に至るまで、あとはもう・・・、というようなことを社会が作っちゃっている。

だからそういうことを考えていくと、やはり若い人たちは好きなようにやれば良いと。その代わり好きなようにやる時に「応援はするよ」と。それが一番だと思うので、何が応援できるかということを考えていかなければいけない。その応援はさっき言ったように技だったら、技をちゃんと教えて行くというのもひとつの応援と考えればいいし。だから「こんなふうにやりたいよ」という人がいたら、僕らの常識から考えていくと「それで大丈夫かな」ということが起きたりするんですけど、もうそういうことを言うべき時ではないでしょうね。やりたいんだったらやればいいと。こういうぐらいたったら応援するから。そういう姿勢が一番実は求められているかなと思います。

水谷 先輩ならではの懐の広さを見せるというところが、若い方の自由度を増すことになるということでしょうか。

内山 懐の広さというよりも、ちょっと申し訳ない社会を作り過ぎてしまったというのですかね。そのことをやっぱりちょっと頭に入れて行動しないと。

水谷 個人的には「僕の年金どうなっちゃうんだろう」とか思いますね。林業もやっぱり儲かっていた時代があつて、今の状態を見てると、じゃあ「南橋さん、作業班として頑張ってるね」となっちゃうのも突き放しすぎということですよ。

内山 これから森の使い方、つまり森ってやっぱり使わなければいけないという一面がありますから、それをどうするのっていうのを考えなければいけない。ただ世界的に見ると、やっぱり森の利用で一番大きいのは燃料的な利用です。日本の場合はそれが極めて少なかった。そういう方面なんかも使えないだろうかと、本当に採算が合わないんだろうか、と。明日の分科会でやるんでしょうけども、例えばバイオマス発電が広がってきて、そうしたらバイオマスのために無理をして森を切るみたいなのが出てきちゃったりして、ちょっと本末転倒というバイオマス発電も結構出てくる。

そういう問題も抱えながらですけど、やっぱり今までだと「木を使う」というのを「建築」とすぐ考える。だけど、もっといろんな使い方を工夫していかないといけなくなっています。それも含めて、そういう知恵をどんどん出していくというのが、現場で頑張っている若い人たちを応援することになることでもある。

水谷 異業種から森林・林業や製材業会に入ってくることで、また新たな用途も見えて来ますよね。明日の分科会は、木の新たな用途やライフスタイルというところでそれぞれの分科会がありますので、連続で参加される方は是非楽しみにしていただければと思います。

森と関わることで学んだこと、 気づかされたこと

水谷 終了時間が迫って参りましたので、もう一回壇上の皆さまにコメントを戻したいと思います。質問です『森と関わることで学んだこと、気づかされたこと』。

あえて一つ、あげていただきたいと思います。

飯野 そうですね、やっぱり森に関わらないと分からない、というのが一番かなと思いました。僕も自分で、森が自分の中でどういう存在なのかみたいなのがとても大事で、だから自分の中の存在として守りたいみたいな気持ちがあったら、それを守るための努力をするんですけど、そこに行かないことにはどうしようもない。なので、僕はまずは森に行くということ、まず自分に行くことも大事ですけど、多くの人に行ってもらわないといけない、と思っています。どれだけ人を森に惹きつけるかというのは、まず連れて行ける力をつけないと何も始まらないなというのが気付きでした。

水谷 まずは行けと。はい、岡田さん。

岡田 そうですね、森に入ると五感がすべて刺激されるというか、活性化される感覚になるんです。そういう感覚ってというのは現代社会で忘れられかけているんじゃないかなというのは感じています。もう一回その森に目を向けて、そういう感覚を皆に感じてもらいたいなと思います。僕自身もですね、森に関わるようになって、そういうものを感じるようになったし、多くの人にそういう感覚を感じてもらいたいという思いがあります。

佐竹 私だけ東京に住んでいるので、地域の話ができなくてすみません。ひとつだけというのはすごく難しいと思ってまして、岡田さんもお話ししていたように、森に行くと多分、森林浴効果みたいなものが出て、どこかしら心が元気になったりだとか、体が軽くなったりとか、そういう感覚はもらえる存在かなとすごく思います。

私たちの本社が岐阜県高山にあって、年に数回高山に行く機会があるんですけど、本当にリフレッシュできるというカリラックスできる場所です。だから、いきなりその地域に行って、居住して、仕事を初めて、というのも良いと思うんですけど、本当にふらっと森に気分転換に行ったり、初めはそういう付き合い方でもいいんじゃないかなと思います。

遅塚 森の中で作業をしていると、森の声が聞こえるようになりますね。スピリチュアル系じゃないんですけど(笑)。森の中で、子どもたちがキャーキャー笑いながら作業をしていると、やっぱり森が喜んでいいるなと感

じることがあります。

鳥居 村や森に関わるというのは、川上村に行くまでの人生とは全く違う状態でした。そこで気づかされたことは、私が楽しいと思ってやることは皆も楽しいんだということを実感に感じる日々です。誰がこう言うとか、吉野ではどう思われるとか、そういうことを気にするのではなくて、私がこれがいいんだと本当に決意をすることで皆の目がぱっとこっちに向く、そこに真実があると思っています。

木を使うことはこういうことですよ、水ってどこから湧いてくるんですか、ということを別に林業に興味がなくても、森が好きとか嫌いとか、虫が嫌いとか言っているでもそこにしか真実はないので、それをちゃんと伝えること。

山で木が売れなくても綺麗にすることができるんですよ。これも山仕事師から教えてもらったんですけど、自分の家に人やお客さんが来るときって掃除をしますよね。綺麗にしますよね。吉野の人達も、皆さんが山に来るとなるとめっちゃめちゃ綺麗に道を付けたり掃除したりします。なので木は売れなくても、山は絶対綺麗になるんです。この言葉を「山の肥やしは人の足跡」という形で私たちは伝えていきます。こういうのも山の人たちから教えてもらった本当に大切なことです。

南橋 ありきたりですけど、作業を毎日していて、森に関わることで学んだことなんですけど、やればやっただけ分からないことが増えるっていうのが気付きです。やればやっただけ「どの角度でこの木を倒したらいいんだろう」と、前のやり方でやると失敗するということのくり返しです。なので、分からないことが増えていくというのが気付きです。それをまた毎日模索しながらするのが楽しいのであって、充実しているなと思います。

水谷 本当に皆さん、森を通じて感じたことは共通項もあるし、それぞれ感じることも違うのかなと思いました。では、その先輩としてですね今日お越しの方の中には、やっぱりちょっともやもやしながら「移住どうしよう」とかですね、「森と関わる暮らし、仕事をしたいな」と思っている方々

に向けて簡単に一言ずつ。

南橋 私も割と就職するとき移住するときも悩んだのですが、今やれるならやっちゃえという感覚でした。特に大学生はまだ若いし、やれることを協力してもらえ人がいる限り、協力を頼んでやるべきだと思うし、挑戦と言うかそこには自分が思っていることじゃないことがあるかも知れないけど、やってみないと分からないというところが大きいかなと思うので、飛びこんで欲しいなと思います。

水谷 「やっちゃえ」と。なんか自動車のCMみたいです(笑)。

鳥居 悩んでいる人も多いかも知れないんですけど、まずは自分のため、自分がどうしたいのかがやっぱり選択する時の焦点になるのかなと思います。私は本当に林業とか全く知らなかったので「林学」という言葉もこういう林業界の方々に会って知りました。大学生の時から本当に海が好きで、20歳代は仕事も年に1ヶ月休みをもらって沖縄にいました。自分の好きなことを20歳代にやりきってから林業だったので、今は「何で20歳代の時にちゃんとしてなかったんやろう」って思うときもありますけど、でもやりきった感がありますので。好きなことはやっぱり遠回りかもしれないと思っても、やり続けた先に多分やりたいことがきっとあると思います。

遅塚 学生時代、林業女子会の活動に少し参加させていただいたりとか、森林の作業で草を刈ったりとか、そういう活動を大学生時代にしてきて、いざ就職活動という時になってやっぱり自分が何が好きなのかなとか、どういうことを私はやりたいんだろうっていうのを感覚的に、いろんな活動を通してつかんでいくのが、やっぱり一步一步だとは思いますが、色んなところに自分の足で出向いて何かやってみるというのが、遠回りのようでも一番大事なことなのかなと感じています。

佐竹 そうですね、私も普通に私立の文系の大学を出まして、普通に就職活動をしました。大手証券会社から内定をもらったんです。けれどいろいろ考えて、それを蹴って、あらためて森関係の職を探し始めました。

そして、いいご縁があって今の会社にいるんです。

森関係の職を探した時に、いまの会社だけじゃなくて、森林組合に入るとか、地域の村に行ってみるという選択肢もあったんですね。私はその時に、まだ「地域に行く」というのは選ばなかったんです。というのも、本当に何と言うんですかね、多分「やっちゃえ」とか「行っちゃえ」と言ってる人は、もうやっちゃってたり行っちゃっている人が多いんですよ(笑)。そう思うんですよ。本当に好きなことって、自分で始めて進めていると思うんですよ。でも私の場合はちょっと、地域に暮らして「1ヶ月にいくらもらえるのかな」ということを考えて、両親にも相談してそういうリスク面が多少あったというのもあったし、今の会社が新しいことをやっているということに興味があったので今の会社にいる訳なんです。だから「やっちゃえ」「行っちゃえ」という気持ちになっている手前で、ちょっと考えている状態だったら、まだ地域で暮らすのは「どうなんだろうかな」という感じがしています。岐阜の高山で暮らしている方々の話からでも、村付き合が大変とか、ちょっと変な目で見られるのではということも聞くことがあります。全然そういうことはない地域もあるのかなと思うんですけど。

まだ「やっちゃえ」「行っちゃえ」にまではいつていない、と思っていたら、もうちょっと考えてから、経験を積んでから地域に行くという方法もあると思います。

岡田 地域は高齢化も進み人口も減っています。若い人の力がものすごい大切になっています。若い人が「一人では何もできないかも」と言うけど、地域の人ですと若い人が一人いるだけでも力強い。「自分一人では何も役に立たない」と思わないでもらいたいと思います。いま地域に行くきっかけというのはたくさんあると思います。その中で行ってみて、もし合わないと思うのだったら帰るのもいいと思うし、十分若い人たちは「まだ若い」ということで、じっくり行ってみて、それからまたじっくり考えるということも必要だと思います。農山村は僕にとっては可能性の宝庫かなと思っています。ですので、もし興味があれば来てほしいと思います。

飯野 森とか農山村地域に「行く」「行かない」に関わらず「今の自分」を大事にしてほしいと思います。これから就職を考えると、悩んだり、周りからいろいろ言われたりとか、応援されたりということもあるんですけど、それを理由にして「自分」を大事にしないと、その先で自分がやりたいこととか、守りたいものというの、ちょっとぐらついてしまったりとか、それがまたどこかに気持ちが変わっていくのは別に良いと思うんですけど、何かに理由を付けて自分の納得できないまま「それをやれなかった後悔」というのが後に残る方がちょっと辛いなと思うので、いま悩んでいる方は悩んでいる自分がいいと思って、これからも「今」という時間を大事にしてほしい。

コメンテーターから

水谷 実体験に基づいたお話を聞くことができました。コメンテーターのお三方、人生の先輩としてコメントをいただけますでしょうか。

宮林 皆さんのお話を聞いて三つほど感じたことがあります。

一つは、森林や農山村が持つ多様性ということですね。林業をやっている人もいれば、幼稚園をやっている人もいれば、木材を立木から売っちゃうという人もいれば、皆で楽しんで山づくりをしている人もいます。このような受け皿の多様性は、森林や農山村は誰でも受け入れようとする懐の広いところがあるからなのではないか。

今、沢山の若い人たちが農山村に入って行きますが、私たちが若い頃というのは農山村から都市にどんどん人が流れて都市化社会をつくりました。つまり資本をどんどん投資して、膨大な生産力を拡大し、大量に消費することで、高度に経済を発展させてきました。ところが、20世紀の後半になってそうした経済効率至上主義は、環境問題の台頭とともに大きく崩れてきました。そこに、市場経済を優先することか、それとも環境を優先して、安心安全な暮らしを持続する循環型社会をつくるのか、といった価値観の転換が進んできました。そ

うした新しい価値観の中でどんどん若い人たちが農山村に入るようになり、そのような若者達を受けとめるだけの、多様性を持っているのが森林であり、農山村ではないかと。そうするとそれに関わって、受け入れ側としては、新しく入ってくる人たちのニーズに対応した社会システムないしは構造をつくる必要があるだろうと思います。

二つ目には、私たちの世代は、いわば高度経済成長の真ただ中から後半にかけて育ってきました。そのような中で育つと、農業にしても、林業にしても、産業としての農林業の発展を優先し、金儲けが優先されました。近年は、そうではなくて、もうちょっと違った価値観でのやり方があるんじゃないか。これは「暮らし」のあり方、つまり林業というものから、環境産業としての森林業や健康産業としての森林業など、もう少し楽しく暮らしながら、ゆとりと豊かな地域社会コミュニティの創造という展開もあるのではないか。これは人間らしい生き方や暮らしに関わって新しい価値が生まれつつあるのではないか。

三つには、1980年代に森林ボランティアが始まった頃というのは、管理不足で荒れている森林を何とかしなきゃいかんと、保育ができていない森林が多く、下刈りをしたり、間伐をしたり、枝打ちをしたりという保育生産に市民が参加して、山を頑丈にしていくという目的でした。それが現在では、森林資源が成熟期になり、主伐・間伐をやって、沢山「木を使おう」という話になってきた。そして、これからは「循環型社会」をつくっていく中であって、暮らしと森林、暮らしと木材といった、日常的に暮らしの中で、森林や木材とかかわり、それが人間らしさを創造するというような新しい流れが生まれて来ているのではないかという印象を持ちました。

西村 6人については「頑張れ」という感じで、他人事というか、冷たい意味ではなくて、「若い人若い人」と、あまり連呼しないで放っておこうという感じです。内山さんが話されたことに共感するところがあります。これまで粛々とやって来た人たちは、自分たちが作って来たものを繋いでほしいとか、継いでほしいということが多い。ただ、あまり若い人たちにはそういうことをかぶ

せないでほしいという気持ちが僕にはあります。見守るというのか、放ったらかしにできると良いなあと思います。

森ということではなくて、中山間地のことですが、60歳を過ぎてからそうした環境の地域に転居する人が多い。都市部で働いていて定年退職をして、高齢の両親の介護もあるし、みたいな感じで帰っていく方が多い。けれど、「もうちょっと早く帰って来れば」と思うんです。事情は、それぞれとは思いますが、例えば60歳で帰って来て農業をやっている方がいます。その方が「帰って来るのが10年遅かった」と言います。50歳で始める農業と60歳で始める農業とではできることが全然違うと。

さきほど集合住宅の話をしてしまいましたが、あの集合住宅はタイムリミットがあって、自分たちの子どもが高校卒業するまでというルールにしました。そうすると大体50前後で出ることになるんです。子育てが終わる、そのときに残りの20年から30年をもう一回つくっていく。「若者、若者」と言っていないで、40歳代後半くらいからの人が農山村に行ったらいいのではないかと、思います。

内山 ちょっと前までの日本の社会は、簡単に言うと田舎にいとやりたいことができない、都会に行けばやりたいことができる、というそういう感覚が広がっていました。

今はそれが逆転してきたと思います。都会には確かに就職先を探せば星の数ほど、少なくとも求人先がいくらかもある。ただそれを見ても「やりたい仕事」を見つけ出すのが困難であって、それに対してやりたい仕事をしようと考えた時、むしろ田舎の方がそれが可能になってきた。だから若い人たちからすると、田舎といっても本当に山奥もあれば、地方の小都市とか、いろいろですけども、そっちの方がフロンティアになってきた。かなり大きい展開がいま始まっているような気がします。

「やりたい仕事」とは何でしょうか。実はこれ、分からないんですよ。例えばいま森林組合で働いていらっしゃる。「それ本当にやりたかったんですか?」と、こういう話になっちゃう。もしかすると「違うことをやりたい

ことがあったのかも知れない」と言い始めてしまえば、際限なく誰にも分からないといえますか。ただ、やりたい仕事って何なのかというと、ある「縁」が出来たということの方が強い。たまたま川上村に行っただと。そしたら、そこで森との縁もあるでしょうし、丸太との縁もあるかも知れないし、もちろん村の人との縁もある。その縁が心地いいものになってきたりすると、それが結局そこにやりたい仕事が発生してくる。だから実は自分でやりたいことを見つけて作っていくように思えるけれど、本当のところは偶然発生した縁が、それを「良い」と感じさせている。

僕は群馬県上野村の人間ですけど、上野村は僕にとって「最高の村なのか」と言われたら絶対に分からない。ただ僕にとっては上野村は手放すことが出来ないものであって、それはやっぱり上野村に縁ができていて、その縁が僕にとっては心地がいい。そこなんです。だから、今こんな展開が始まっていて、かつて都会にはやりたいことが一杯あるよとしていた時代には、本当にこう「私がやりたいことだ」という話だったのだけど、今はその「私が」と言いながら実はそういう縁のようなものが「私」を導いているというような、そういう時代が変わって来ている。だから縁を大事にして、あるいは縁をどう使っていくか、だと思います。

水谷 示唆に富んだコメントをいただけたと思います。ありがとうございました。

今日のトークショーは移住を促進するということではなくて、森との関わり方っていろいろあるよねと、そのことを知っていただけたのではないのでしょうか。移住するやり方もあれば、都市部に住みながら森と関わるやり方もあるし、本業として関わるやり方もある、NPOのボランティアとして関わる方法もある。常にオルタナティブな選択肢があるんじゃないかなと。そういったことをあらためて気付くことができたトークでした。みなさま、ありがとうございました。

第1分科会【生きる】 人生に森を活かす

参加者数 36 人

「元気に山で暮らす」

都市から山村地域への人の流れが太くなりつつあります。Iターンで山村地域に移ったり、あるいは、都市の消費者とつながりながら、森林資源を活かして、山村地域を元気にしている活動を紹介します。山、そして、山で生きる人が元気になる可能性を探りましょう。

谷吉 梢 シマントモリモリ団

東京生まれ、東京農大を卒業後に高知県四万十市へ移住。田舎暮らし4年目、冬は自伐型林業、夏は四万十川のカーヌーガイドをして暮している。季節によって仕事が変わる田舎ならではの仕事を楽しんでいる。

伊藤 正俊 株式会社高橋工務店

地元愛知県の民間林業事業体で就業中、実際に山間部に住んでみたいという思いが募り、平成24年度の「緑のふるさと協力隊」に応募。そして山形県小国町へ派遣されました。協力隊活動期間は一年ですが、一年では小国町を楽しみ尽くせません。自然環境は厳しい所ではありますが、それを補って余る魅力がまだ発掘しきれておりません。今年度には念願のマイホームを手に入れ、ジツと腰を据えて小国町で暮らしていきたいと思っています。

西原 啓史 株式会社東京・森と市庭 代表取締役

株式会社トビムシにて、各地の林業、木材流通のコンサルティング、自治体・地域住民との合併・参画による地域木材商社「株式会社西栗倉・森の学校」の設立などに関わる。

2013年から奥多摩にて、森と都市をつなぐ新事業会社「東京・森と市庭」の設立に参画し、本年1月より代表取締役。

コーディネーター

鹿住 貴之 認定 NPO 法人 JUON (樹恩) NETWORK 理事・事務局長

1972年生まれ。98年大学生協の呼びかけで設立された、都市と農山漁村を結ぶ JUON NETWORK に事務局スタッフとして参画。99年3月より事務局長。その他、NPO 法人森づくりフォーラム理事、NPO 法人日本ボランティアコーディネーター協会理事等様々な市民活動に携わっている。著書に『割り箸が地域と地球を救う』（創森社・共著）等。

|| 報告

山岸 貴生

NPO法人地球緑化センター事務局長

都市から山村地域へ向かう人の流れが太くなりつつある。これまでのように地方から都市への流れではなく、地球緑化センターの「緑のふるさと協力隊」や総務省の「地域おこし協力隊」のように都市部に住む人、特に若い人が山村地域へ向かう動きが次第に大きくなってきている。しかしその一方で、山村地域での生活にも課題がある。雇用や収入面に不安を抱く人がいるが、それだけでなく地元の人との近所づきあいといった都市側では希薄となりつつある人間関係に悩むケースも見られる。

「生きる」をテーマとした第一分科会では“元気で山で暮らす”と題し、Iターンで山村地域に移った人、あるいは都市の消費者とつながっている人というように、地域にある資源をいかして山村を元気にしている事例を紹介した。事例発表では、高知県四万十市の谷吉梢さん、山形県小国町の伊藤正俊さん、そして東京・森と市庭の西原啓史さんがそれぞれの活動を発表した。続いて行われたグループワークでは山村地域で暮らす際に障壁となっている課題を出し合い、その解決策も話し合ってもらった。

事例発表の一人目は谷吉梢さん。谷吉さんは四万十市に移住して4年目になり、林業とカヌーを組み合わせた暮らしをしている。学生時代に四万十市の風景やそこで暮らす人に魅せられ、卒業後は農林水産省の「田舎で働き隊」に参加。半年間、四万十市で過ごしたのちに移住した。もともとは東京で就職し、定年後に移住しようと考えていたが、その地域の10年後を考えると早く移ったほうが良いと考え、移住を決断。春から夏にかけてはカヌーのガイドをし、秋から冬にかけては林業をして暮らしている。都会では一つの仕事をしていたほうが安定すると考えられているが、田舎では色々な仕事を組み合わせることで生計を立てる人がいると聞き、カヌーと林業の二本立てで暮



らしている。女性で林業は絶対に無理だと思っていたところ、自伐型林業と出会う。半年間の講習で基本的な機械の取り扱い方法を学ぶ。地元の仲間と「シメントモリモリ団」という団体を立ち上げ、7haの山を借り、40年生のヒノキの施業をしている。間伐から搬出まで全て自分たちで行っているが、自分たちのスタイルで施業ができるのが魅力だと語る。自分の庭のように山を考えるようになったため、例えば道を作る場合もなるべく負荷のかからない方法を考えるようになった。

山での仕事を軸に活動しているうちに、いくつか新しい仕事も増えてきている。庭の木の手入れや炭焼き、間伐体験など地域の人との新しいつながりが出てきているので、自伐型林業から付随してくる活動も面白くなっていると話す。

続いて事例発表をしたのは山形県小国町の伊藤正俊さん。

愛知県出身の伊藤さんは、民間の林業事業体で働いていたが、木を伐るだけの毎日が続いていた。地元の人とのつながりが感じられず、山の暮らしやそこで暮らしている人の気持ちを知らないうちになり、平成24年に地球緑化センターの「緑のふるさと協力隊」に参加し、山形県小国町へ派遣された。

山の恵みが豊富にある小国町で暮らして5年目になる伊藤さんは、山村で暮らすというのは、自分たちの手で地域を守ることだと感じている。そこが都会とは違う点。小国町に残る狩猟文化も人が暮らす場所と熊が住む場所の境界線を作る意味があると感じている。また消防団や山岳遭難救助隊の活動にも積極的に参

加している。町の中心部に消防署はあるものの、現場にいち早く駆けつけることができるのは消防団。また春先には山菜採りで山に入り遭難する人も多く、その時は地元の消防団も捜索に加わる。消防団活動などは地域を守る活動として非常に重要である。小国町は雪深い地域だが、その雪を使って楽しむことも考え、青年団の有志と一緒に小学校のグラウンドに雪で迷路を作るイベントを開催。

移住して5年目を迎えたが、もっともっと山に入りたい気持ちがあると話す。時間があれば山菜採りに深い山にも行き、狩猟免許も取り、熊やウサギを獲りたいと考えている。昨年から有志ではじめた取り組みとして、ブナ材を使って家具の製作にも動き出している。ブナは薪にしか使われていないが、手触りのいいブナを使って家具など製品化したいと考えている。そして、小国町の各地区に住んでいる若い人をもっとつなげたいという思いがある。広い小国町の中でも青年団などの活動が盛んな地区もあればそうでない地区もある。若い人たちをつなげることで、小国の活性化になればと考えている。その地域に住んでいる人たちが楽しくしていないと、外から来た人にも魅力を感じてもらえない。外部からの人ばかりに頼るのではなく、その地域に住んでいる人ともっと色々なことに取り組んでいきたいと試みている。

最後の事例発表は、都市の消費者と地域資源を結ぶ役割をしている株式会社東京・森と市庭の西原啓史さん。

森と市庭の事業は、東京・奥多摩地域の大規模な森林所有者との出会いがスタート。森林所有者の中には規模が大きい故に様々な課題を抱えているところがある。製材所も少なくなり、木材の利用という出口の確保も課題になっている。森と市庭は、株式会社トビムシ、株式会社チームネット、株式会社ディー・サイン、R不動産株式会社の4社が共同で2013年に立ち上がった。それぞれの会社の専門を背景にしながら、山を管理し、その木材を製材し、商品化までして消費者に届けようと林業版の6次産業化を目指している。また、江戸時代には奥多摩地域は林業中心に栄え、



お金だけでなく人の交流もあったが、そういった時代を取り戻していくことも目標に掲げている。

森と市庭では、間伐材を使ったカーペットの製造・販売をしている。間伐材は曲がっていたり節があったりと、一般的な用材にはしづらい面もあるが、その欠点を逆手にとって、オフィスに普及しているタイルカーペットと同じ寸法の床パネル材の製造を手掛けている。厚さは9mmでタイルカーペットと同じ厚さで、オフィスでもそのまま張り替えることが可能。通常、床をフローリング化するには工事のため手間も費用もかかるが、タイルカーペットと同じようにオフィスでも簡単に敷くことができる。短くて幅が狭いため節のない部分を選ぶことができる。また床のレンタル事業にも着手。無垢の木は長く使うことで艶が出て味わいがでてくる。普通の商品は年数が経つにつれ、経年劣化が進み、減価償却という概念だが、木はそうではないのではと考えている。木の良さは長く人の手で使ってもらうこと。そこを新しい価値として、間伐材を使った床のレンタル事業を手掛けている。オフィスの内装材にも間伐材を利用できないか、その可能性を探っている。

奥多摩地域には個人や企業も含めて木材の利用を手掛けている事業者がたくさんある。そういう所とも連携を深め、もっと奥多摩の魅力を伝えていければと考えている。東京都では多摩産材を使った木育も進めているが、森と市庭でも青梅など西多摩地域の保育園との連携を深め、多摩産材の活用を探っている。木育は子どもたちにとっては重要な機会。園児向けの体験メニューも行い、実際に森に入る機会を増やすプロ

グラムづくりを検討している。

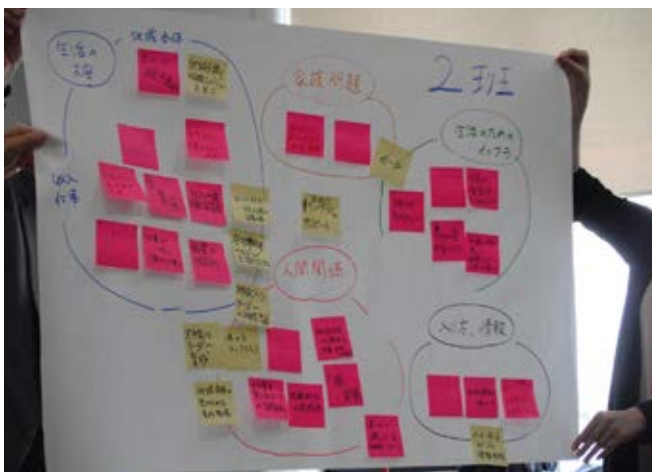
3名の事例発表に続いて、参加者同士でグループワークを行った。「元気に山で暮らすために課題となっていることは？」をテーマに、参加者が5つのグループを作り話し合った。グループ内ではそれぞれ課題を出し合ったのち、その解決策についても考えてもらい、最後にグループ内で出てきた意見を発表してもらった。

参加者から出てきた課題には、雇用や働く場などの収入を得る手段が少ないのではないか、また住む家などの住環境、災害や医療などのインフラ面での不安、暮らしていく上で欠かせない地元の人との人間関係、そして情報量不足などが挙げられた。やはり地方での暮らしになると雇用面での不安、また仕事があったとしても収入が少なく実際に生活するのは難しいのではないかと考えている人が多かったが、その地域ならではの資源を利用して収益を作り出す仕組みを構築する必要があるのではとの意見が出された。また、町や村としての中長期的なビジョンを示すことで、新しく来る人にも安心感を与えられるのではないかという声もあった。そして地域での人間関係に対する不安も多かったが、移住する人は移住者同士でかたまらずに、積極的に地域に溶け込む努力する姿勢や地元の人との関わり方をサポートする人材も必要だという意見が出された。インターネットを活用して、実際に移住した人の声や生活の仕方などの情報を発信していくことで、関心を持っている人が具体的にイメージすることもできる。その点では行政側の役割も大きいと感じる参加者もい

た。

「元気に山で暮らす」をテーマに3人の事例発表の後に参加者でグループワークを行った第一分科会。実際に移住した人として谷吉さんと伊藤さんからは、その地域に移住した経緯や暮らしについて話してもらったが、分科会の参加者にも地方での暮らしに興味を持っている人も多く、質疑応答では具体的な暮らし方について質問が出された。その意味からも実際に山村地域で暮らしている2人の話は参加者にとっても興味深いものがあつたと感じる。2人とも地元の人との関わりがとて強く、その地域に入って暮らしていくには、自分から積極的に溶け込もうとする姿勢が重要なのだと感じた。また実際に移住した場合、地元の人との人間関係に悩むこともあると思われるが、そこでは移住者と地元の人との間に入りコーディネートする人材が必要だと感じた。溶け込もうとする意識はもちろん大事だと思うが、周囲にサポートしてくれる人がいるかいないかで、安心感も違ってくる。実際に移住した人や地域のリーダー的な人がサポートしてくれる仕組みがあると移り住もうとする人には少なからず安心材料になるのではないかと感じた。

「そこに住んでいる人に元気がなければ、その地域の魅力は伝わらない」と伊藤さんは話していたが、Iターンのような移住者が積極的に地元の人と関わることによって地域社会が元気になることもある。それが地域の魅力を伝えることにもつながるのではないかと感じた。



1 発表者・コーディネーター 印象に残った発言・報告を簡略に記入してください。

1. 谷吉さん

「(四万十市に)行くなら今しかないと思った」「最初はボランティアから始めて、4年間かけて仕事にしてきた」「自分にあった仕事を組み合わせていった」

2. 伊藤さん

「(小国町に)とりあえず1年間行ってみようと思った」「自分たちで出来ることは自分たちでやり、『地域』を守る、というのが都会と山の違うところ」

3. 西原さん

「株式会社東京森と市庭の会社としての使命は、都市と森の"同期"である」「地域が多様性をどのように受け入れていくかが大切だと思う」

2 参加者 印象に残った発言を簡略に記入してください。

5班に別れて、①実際に「元気に山で暮らす」ための課題は何か、②先の課題の解決策は何か、の2点についてワークショップ形式で話し合った。

各班ともに共通して、安定した雇用・収入を課題として挙げる意見が出ていた。また、魅力の未理解や、地元の人の人間関係を課題とする意見もあった。これらの解決策として、情報の発信を行っていくことが大切だという意見が多くあった。また、女性も含め、リーダーを育成していく必要があるという意見もあった。

3 感想 参加して感じたことを箇条書きで記入してください。あなた自身を含めて若い世代が、これから森と関わっていくうえで参考になった点、また提案などありましたら記入してください。

1. 谷吉さん・伊藤さんが二人とも「今しかない」「とりあえず」という気持ちで「山」に飛び込み、時間をかけて仕事を作ってきた一方で、都会の人たち(ワークショップの参加者)は「山」に仕事があるのかわからないのか分からないことを不安に思っており、ここに大きなギャップがあると感じた。
2. 一方で、都会で企業に就職する若者を改めて客観視してみると、必ずしも就職先の企業でどんな仕事をするのか理解している、というわけではない。
3. つまり、都会であっても「山」であっても、どんな仕事をして生きていくのか、などということはやってみないと分からないことであって、根源的にはその点に都会と「山」の違いはあまりないのではないかと考えた。
4. 元気に「山」で暮らす人を増やしていくには、「山」でもこんな面白いこと(仕事)をやっているよ!こんな面白いこと(仕事)ができるよ!という発信を地道にやっていくとともに、都会の人たちもそういう情報にアンテナを張っていくのが良いのではないかと考えた。

1 発表者・コーディネーター 印象に残った発言・報告を簡略に記入してください。

1. 谷吉さん

林業×カヌーで生活していることが、自分が生活しているところでは一つの職業している方がほとんどのため、二つ以上の仕事をやられている方の話は刺激となりました。

移住のきっかけでお世話になっていた、おじいさんがお亡くなりになって移住を決意した時に、10年後にはもうこの景色はないということで、今しかないというのは、今後の自分自身の道を選ぶうえで参考になった。

2. 伊藤さん

製材所や消防団、青年団に所属し、地域にとけこんでいると感じた。自分たちの手で地域を守るといい、その時に外部の人を頼らないと語った。観光とはまた違った地域の形を感じました。

3. 西原さん

先のお二方と違い、首都圏近郊の奥多摩で活動している方である。そこには、首都圏近郊だからこそできるもの、方法がありそれは、都会の中心では行えないドローンの試験であったり、首都圏のオフィスに商品を売買したりすることである。これはまた新たな形での地域のかかわり方だと思う。

3 感想 参加して感じたことを箇条書きで記入してください。あなた自身を含めて若い世代が、これから森と関わっていくうえで参考になった点、また提案などありましたら記入してください。

私はピンチヒッターとして参加しました。そのため純粋に参加者としての感想となります。

私も将来緑のふるさと協力隊や地域おこし協力隊の制度を利用して移住を考えていて、今回先輩方の話を聞き、まだ自分に足りない覚悟がわかり、そして移住の魅力を聞きさらに農山村に行きたくくなりました。

第2分科会【遊ぶ】 森の遊びをライブ体験

参加者数 21 人

「森をあそびつくそう」

森は、従来、生活の場であり、子どもの遊び場でした。いまでは、森は生活から遠ざかってしまい、暗く危険なイメージも強くなっています。しかしながら、人が生きるためには森は欠かせない存在であり、その重要性はますます大きくなってきています。遊びは決して子どもだけのものではありません。この分科会では、実際に森での「遊び」を体験し、改めて森の魅力を、「遊び」を通じて感じ、森と人とのつながりを考えます。

高田 研 公立大学法人 都留文科大学社会学科教授

都留文科大学社会学科教授 公立学校教員、文科省職員を経て岐阜県立森林文化アカデミーの後、現職。専門は環境教育学。高等学校において参加型授業の研究。現在は森のようちえんに熱中。全国公害資料館連携フォーラム代表。公害地域再生センター、RQ 災害教育センター、ボランティア学習協会、NPO 都留環境フォーラム理事。著書：2012、『環境教育学』社会的公正と存在の豊かさを求めて 法律文化社（共著）

佐藤 洋 都留市宝の山ふれあいの里・ネイチャーセンター 学芸員（都留市産業課所属）

宮城県の農林高校林業科卒業後、都留文科大学・環境生態論ゼミで動物行動学を学ぶ。1996年、都留市役所商工観光課の博物館学芸員として入庁。小動物の「感察会」や展示を実施する傍ら、観察手法の開発・普及活動にも努める。2012年からは都留市内の保育園・幼稚園保育士研修や森を介し、ロゴソールを活用した 森林環境教育を展開している。各地でワークショップ・講演開催多数。

倉品 真希子 アルバ奏者

36弦のアルパ、アコースティックな生音が届く空間でラブソングと南米音楽を奏でる。大切な人へサプライズな出張演奏「音楽のギフトカード」発売中。農家の庭先空間で報酬の代わりに有機無農薬の野菜や果物で頂く「オーガニックコンサート」展開中。弾き語り、自主演奏企画多数。オリジナルCD3種リリース。

高橋 京子 ウレシバモシリ 森と子育て文化をつなぐ研究会 代表

自然保育コーディネーター、国際自然環境アウトドア専門学校研究科自然保育専攻非常勤講師 主に都市型の保育現場に身近な自然をつなぎ、子どもたちの感性や育ちのエネルギーを高める保育教育活動を進めている。保育園・幼稚園の自然あそび・木育指導、子育て講座、子どもと自然をつなぐ保育者向け研修会、講演。

コーディネーター

杉野 卓也 東京農業大学 多摩源流大学プロジェクト

1974生まれ、東京農業大学博士課程満期退学。2006年より東京農業大学の多摩川源流大学プロジェクトに携わる。多摩川源流大学プロジェクトは、山梨県小菅村をメインフィールドに大学と地域の連携で様々な活動を行うもので、体験実習をとおした地域を担う人材の育成と、住民が主体となる地域づくりのあり方について研究を進めている。近年は大学の授業において専門家とともに商品開発やメディア発信も行う。

|| 報告

後藤 洋一

NPO法人樹木・環境ネットワーク協会

登壇者の発表概要

● 高田 研さん

小学校の教員をやっていた経験から、学校教育において、森や自然の中に足を伸ばさないケースが実に多いこと、そしてその原因はどこにあるか、考えさせる話だった。「いまの学校の先生は野外に連れて行かない、それはなぜか?先生は野外のことで何か聞かれたら困るから連れて行かない」という学校の先生が抱えている問題も多い。森の利用をさまざまな視点から考える今回の分科会の問題提起として講演いただいた。



● 倉品 真希子さん

森林という空間を使って、参加者たちは倉品さんのアルパの演奏を楽しんだ。アルパとは、南米パラグアイの楽器だ。西洋のハープを真似たもので、インディアンハープという別名もある。自然を描写した曲が多く、今回は「コンドルは飛んでいく」「鐘つき鳥」などの鳥の名前が曲名に入っている曲や、自然の音を材料に倉品先生が作曲した「さくら色のしずく」を演奏してもらった。

倉品さんは農家の庭先で報酬の代わりに有機無農薬のお米や野菜、果物を頂く「オーガニックコンサート」を

行っている。以前はハードな演奏をこなしていたことで、体調を崩しがちだったが有機無農薬のものを中心に食べるようになってから、気持ちに変化が生まれるようになった。現在は農家に恩返ししたいと、音楽を通して都市と農村をつなぐ活動をしている。人と人とのつながりの中で自分の音楽を表現するという話をしてもらった。



● 佐藤 洋さん

2012年より都留市内の保育園・幼稚園保育士研修や森を介し、ロゴソールを活用した森林環境教育を展開している。ロゴソールとは製材用のチェーンソーで、丸太を任意の厚さの木材に加工することができる。分解できるため持ち運びに適していて、4人もいれば山の上に上げることができるそう。

芝生でロゴソールを使いだすとその聞き慣れない爆音に、近くを通りかかった一般の方もたくさん集まってきた。「受注はありますか?」と参加者から好みの厚さを聞

き、ロゴソールで木材を切りだした。大人も子供も材ができる様子を目を輝かせて見守っていた。切ったばかりの木材はオイルの匂いがした。しばらく時間が経つとちゃんと木の香りがするそうだ。保育園などでロゴソールを使うと、子供たちは材ではなくまず木くずに興味を持つそうだ。今回は子供だけでなく大人まで楽しそうに木くずを集めて持って満足そうに帰っていた。

佐藤さんは「山と人を繋ぐ仕事をしている」と話していた。



● 高橋 京子さん

都市型の保育現場に身近な自然をつなげる活動をしている。冒頭の高田先生の話を用いし「いまの学校の先生は野外に連れて行かない、それはなぜでしょう?——先生は野外のことで何か聞かれたら困るから連れて行かない」というお話から講義がはじまった。今回は子供の気持ちになって、実際に森の中で遊びをした。

三つ葉のクローバーの葉っぱを3人で1枚ずつ持って引っ張り、一番長い人が勝ちという簡単な遊びからスタートした。みどり色のものまるいものやふわふわなものなどお題に沿ったものを探してくるという遊びもした。子供たちを集めるときは「集合!」と声をかけるのではなく、歌を歌って子供たちが集まりたくなるような雰囲気を作るというちょっとしたコツも教えてもらった。お気に入りの葉っぱを各自探してきて障子紙に貼り、葉っぱにシールで目をつけたりしてみんなで1つの作品を作り上げた。ほかにも森の中での絵本の読み聞かせや、粘土や自然の素材を使って作ったものを森の中に隠してみんなで探し合うなど、植物や生きもののことを知らなくても簡単に遊べてすぐにマネできそうなものを教えてもらった。これらの体験を通じて、聞かれたら困るなんて関係ない。知らないことだらけでも、自然の中で遊ぶことは十分にできるということを学んだ。



参加者からの発言

- ・ 屋外で静かに聴く音楽はすばらしかった。
- ・ ロゴソールをはじめて見て、普段から使っているものが、作られていく過程を見るようでした。
- ・ アルパも木からできていて、こうして作られていくのかなあって想像しました。
- ・ 五感で新しい自然の触れ方や見方で刺激的でした。

1 発表者・コーディネーター 印象に残った発言・報告を簡略に記入してください。

1. 高田さん
いまの先生は、とすると「聞かれたら困るから」外に連れていかない。
そうではなく、先生も勉強するスタイルが良い。森林や地方には宝が眠っている。
2. 倉品さん
沢山の人に聴いてもらい、みんなが優しい気持ちになればうれしい。
3. 佐藤さん
子どもがどのように変化するか？
興味を受け入れる。体験ではなく体感。木から材へ変わる過程を見てもらう。想像力に刺激を。
4. 高橋さん
みんな異なる感覚や好みがあっていい。みんな違っていい。五感を使って感じる。

2 参加者 印象に残った発言を簡略に記入してください。

1. これまで考えたことのなかった視点が得られた。
2. ぜいたくな時間が過ごせた【お金には換えられない】。気持ちが良かった。眠くなった。
3. みんな笑顔になっていた。子どもになっていた。

3 感想 参加して感じたことを箇条書きで記入してください。あなた自身を含めて若い世代が、これから森と関わっていくうえで参考になった点、また提案などありましたら記入してください。

1. 異なった方法で「気づき」が生める。人の興味はそれぞれだけれど、視点を与えることができる。
2. アルバと木材加工、木材加工と森のようちえん、共通点がある。
そこを見つけ出し、楽しく感じてもらうことが大切。
3. 子どもになったつもりで、「大人の気づき」ができた。
誰でもどこでも、森とつながることができる。その様な役割を担いたい。
4. 子どもの参加者はなかったが、ワークをしていると子どもたちが集まってきた。つながり・空間ができた。
5. 遊びは、生業(なりわい)に発展させることができる。

1 発表者・コーディネーター 印象に残った発言・報告を簡略に記入してください。

遊びの中での森へのアプローチ、森の活用と遊びを狙いとする。東京農業大学構内にある中庭にて活動した。
以下に記載する

1. **高田さん** 野外での環境学の授業が広まらない理由について
森へのアプローチ方法の意義、発表者の方々の導入部分を担う内容
2. **倉品さん** 森の空間を利用したアルパ演奏会
森の空間利用について、素敵な音色で森の中にいると想像できるような演奏を聴いた
3. **佐藤さん** ロゴソールと木材を活用した遊び
森の素材利用について、大学構内にいた中高生と即席の子どもプログラムを開催。臨機応変な対応を見れた
4. **高橋さん** 森の素材を活用した子どもと自然をつなぐ遊び
森の空間・素材利用について

遊ぶということに目的をつけてしまうと、それは遊びではないのではないか。

→プログラムがあるものは目的がある…これは遊びとは言わないのか。プログラムがあるけれど遊びだという認識にするというのも大切である。

2 参加者 印象に残った発言を簡略に記入してください。

1. 森の空間利用と素材利用について、森の関わり方のノウハウについて、学ぶために来た参加者が多かった。
2. 普段、学んできている分野とは異なる森への関わり方について、知ることができてよかった。

3 感想 参加して感じたことを箇条書きで記入してください。あなた自身を含めて若い世代が、これから森と関わっていくうえで参考になった点、また提案などありましたら記入してください。

【今後の課題】

1. 中学生や高校生の心の安定、社会からの孤立を防ぐために森林を活用する
2. 日常生活と森林の関係や、森林と暮らしていると感じられる街づくりを行う
3. 日本国民が森林の置かれている状況を理解し、森林に対する意識を変える
4. より多くの人に森林と触れ合ってもらうために地籍調査を進め、市民が使用できる森林を増やす

【感想】

今回の森林と市民を結ぶ集いは、私の知らなかった活動をしている方が多く、森林にはまだまだ多くの可能性があるとあらためて感じる事ができた。

また、子どもの野外教育には驚いた。外で絵本を読むなんて絵に集中できないと思っていたが、その考え方が間違っていた。自然と関係のある絵本を読むことで、絵本の中に自分がいるように感じられて、勝手に想像し始める。自然と触れ合うことで五感を使うことは知っていたが、それをどう遊びと関連させるかは知らなかったため、いい経験になった。今度は屋外で「不思議の国のアリス」を読んでみたい。

さらに、若者によるトークショーでは、世代や地域の価値観の違いは悪いことではなく、新たな切り口を見つけきつかけになると考えられるようになった。

最後に、私はこの仕事で関わったすべての方にお礼を言いたい。ありがとうございました。

第3分科会【学ぶ】 つながる昔と今

参加者数 31 人

「先人の知恵に学ぼう」

私たちと自然とのつきあいは、さまざまな知識・伝承・技術などの工夫が積み上げられています。現代の生活から忘れてしまいそうな、あるいはすでに感じることができにくくなってしまっている世界に、大切な「技」や「知恵」が眠っています。現代社会での、なにげない習慣・伝統・産業などの「昔」と「今」のつながりを考えます。

柴崎 茂光 国立歴史民俗博物館準教授・民俗研究家

埼玉県生まれ 経済学者(林業・環境・開発経済学)

1997年より屋久島の研究を開始。博士論文のデータ収集のため、2001年～2002年に屋久島で暮らし、暮らしの中から見える屋久島が、外から見る印象と大きく違うことに驚く。地域社会の発展には、地域の歴史を深く知る事が不可欠であると気づき、現在の研究姿勢に辿り着いた。近年は、屋久島などの森林軌道跡を歩きながら、当時の生活を知る方々から話を聞き、再び現場に向かうという調査を続ける。民俗研究映像「屋久島の森に眠る人々の記憶」(80分、2015年)、「復活した岳参り」(20分、2015年)など映像制作も手がけている。

羽鳥 孝明 グループ浜仲間の会・森林インストラクター

1987年「浜仲間の会」(東京)発足に関わる。その後「レジャー林業」という言葉と共に、都市住民が関われる「山仕事」というテーマに活動をしてきた。現在は「機械以前の山仕事の聞書」の延長上で、「古文書からどのような山仕事があったか」をテーマに活動をしている。「遊ぶ!レジャー林業」発行。「山の親父のひとりごと」1・2・3を編集。協力・小森谷 孝志(こもりや たかし)群馬県林研グループ連絡協議会副会長

石倉 敏明 秋田公立美術大学アーツ&ルーツ専攻講師

1974年、東京生まれ。人類学者(芸術人類学・神話学)。1997年よりダージリン、シツキム、カトマンドウ、東北日本等で聖者(生き神)や山岳信仰、「山の神」神話調査をおこなう。著書に『野生めぐり 列島神話の源流に触れる12の旅』、『人と動物の人類学』(共著)など。講演タイトル「受け継がれる山と森の思想」。

山田 博康 北秋田市議会議員

1950年秋田県北秋田市阿仁根子(現在)生まれ。1965～1975年故郷を離れ、Uターン。マタギ発祥の地といわれる阿仁根子での少年時代の記憶と故郷にUターンしてからの活動の中、大阿仁地区のマタギの現況を地域の内外に発信する。9年間地元農協勤務。1987年から4期農協理事。1990年から市議会議員。

コメンテーター

内山 節 哲学者

1970年代から東京と群馬県上野村の二重生活を続けながら、在野で、存在論、労働論、自然哲学、時間論において独自の思想を展開する。2016年3月まで立教大学21世紀社会デザイン研究科教授。著書に『新・幸福論 近現代の次に来るもの』『森にかよう道』『「里」という思想』『日本人はなぜキツネにだまされなくなったのか』『戦争という仕事』『文明の災禍』ほか。

|| 報告

原田 敏之

NPO 法人森づくりフォーラム理事

午前中は4名による、それぞれの専門分野からの発表。午後は、午前中の発表を受けての内山節さんによるコメントがあり、その後で発表者4名によるパネルディスカッションが行われた。



【発表】

● 柴崎茂光さん

まず、氏制作による映画「屋久島の森に眠る人々の記憶」の冒頭部分を全員で観賞して共有。一般化されている屋久島のイメージと、実際との違いを確認した。

それは特に、原生的自然が広がっていることが強調されているのに対し、暮らしのために島の住民が営々と森に働きかけてきた歴史の証が至るところに展開されている点に、象徴される。藩政時代からの薩摩藩による屋久杉の伐採、板割り、搬出の痕跡や、住民による山の神との接し方と燃料利用跡、自然状況に合わせるための集落移転の歴史など。近代になってからは国有林となった営林の蓄積—とりわけ森林軌道跡とそれを利用した住民の暮らしの痕跡など。森とともに暮らし続けた人々の“はたらき”が現在の島を形づくっていることを深く知っていく必要がある。

やはり、これからの「森とともに暮らす社会」づくりを考えるにあたっては、表面的な理解にとどまることなく、人々がそこで暮らす深い意味を考えていかなければならない。

● 羽鳥孝明さん

明治31年生まれの中中萬蔵氏が、明治の頃の山仕事の様子を後世に残そうとの意図から、昭和34年に群馬県高崎で描いた絵巻物「明治伐木運材図絵」を紹介しながら、当時の繊細な技術や、今に通じるもの、などを考える内容となった。

図絵では、普段は農業で暮らす人たちが農閑期の冬などに奥山に小屋をかけ、泊りがけで仕事をするために、鍋釜、みそ醤油の食料や寝具など一切を背負って運ぶ様子から始まる。仕事は、斧や横引きの大鋸で広葉樹と見られる大木を伐倒し、玉切る。そして山土場らしい所で屋根用の皮をはぎ、まさかりで角材にした後に、必要に応じて縦引き鋸で板に引く。里まで運ぶのは牛を引く専門業者で、さながし（管流し）や筏で流送する図も描かれており、水上げされた後は、大工がちょうなで仕上げている。

これらの絵から、それぞれの作業にはかなりの修練が必要であることがよくわかり、機械以前の時代にさかのぼることで、大切な技術がどのようにあるのかを確認することができる。

● 山田博康さん

「マタギ発祥の地」と言われる阿仁・根子で、マタギの現況を発信している。ただ、前世代と現在とでは、基盤となるものが変わってしまっている。以前は、いろいろな生き物を生活のために捕獲したもので、必要以上の殺生はしなかったが、今は観光や村おこしなどの考え方が入ってきたり、伝承そのものが目的になっているという要素もある。

また、マタギにおける信仰的要素は、収穫は全て山の神からの「授かり物」と解釈するところに現れており、自然と共存する人々の暮らしへの姿勢がうかがわれる。そしてそこから発生する「またぎ勘定」は、

収穫を全員で平等に分けるやり方で、初心者もベテランも分け前は全く同じ、というルール。これからの社会を考えるにあたって、このような考え方を参考にすることで、新しいしくみを組み立てていくことができるのではないだろうか。

● 石倉敏明さん

ネパール、カトマンズの町には、マンダラの形がさまざまに組み込まれている。ヒンズーの町だが、風水、そして仏教の神につながるものがある。

ひるがえってわが国では、出羽三山がマンダラを示すように、「山」と神を一体のものとして観る発想があり、通じるものがある。

さらに、東北地方のさまざまな祭祀、伝承を探ると、山と女性（母胎）の関係に死者の世界へ生まれ変わりをしているなど、「生きる者」の根源的な願いが込められている。そして「シシ踊り」などのように、舞う者が動物と一体となる感覚を得る体験をもたらすものなど、人と自然との深いつながりを持つという広がりもある。

このような、現代の社会では理解が及びにくい人と自然の深く広い世界を、もう1度学び直していくことが必要なのではないだろうか。

【コメント】

● 内山節さん

哲学者、「2016森林と市民を結ぶ全国の集い in 東京」実行委員長

- ・ 山岳信仰でも、マタギにしても、時代によってあり方や捉え方が変遷してきており、多様性がある。その一方で、人類発生以来ずっと変わらないでいる要素も持っている。そのあたりについて、注意深く見ていく必要がある。
- ・ 仏教が「真実」を語るものではなく、業（方法）を教えるものだということや、「気」の存在など、現

在の私たちにはわからなくなってしまったことが多いため、このテーマには困難を伴うことが多い。

【パネルディスカッション】

コーディネーター：柴崎茂光さん

主な発言

- ・ より多くの人に、先人の発想や技の素晴らしさに気付いてもらうためには、きっかけとなる体験が必要だ。一パネリスト各氏の、それぞれのきっかけとなった体験を開陳した。これらを参考として、より多くの「きっかけづくり」を工夫していく必要がある。
- ・ 動力や機械を使うことが当たり前になっているが、その基盤を支えているのが、暮らしを通じて蓄積されてきた思想と技術だということを、もっとよく知るべきではないか。

参加者から

- ・ 全く知らなかったことをいろいろお聞きした。これからの勉強に生かして行きたいと思う。
- ・ 何事も、地道にこつこつやることが大切だと思う。

■ 先人の知恵に学ぼうとするとき、今回取り扱った話題以外にも、さまざまな分野がある。いや、ありとあらゆる場面から、学ぶことができる。その意味で、現在さまざまな分野を対象として掘り下げ、かつ発信しようとしている多くの方々がおられるが、さらに一層多くの人々の地道な努力が必要である。

一方で現在行われているさまざまな「仕事」も、いずれは検証の対象となっていく。つまり、今の私達自身が、後の時代に少しでも多く評価してもらえるように、真摯な取り組みをしているかが、試されているのではないかと反省させられる。

これらのことが浮かび上がったと思う。

1 発表者・コーディネーター 印象に残った発言・報告を簡略に記入してください。

1. 柴崎さん 屋久島に残る先人の知恵

山や森には昔からたくさんの価値がある。しかし、現在では観光資源となる山や森ばかりが保護区となり、メインの自然ばかりが守られ、その他の自然や文化が失われている。私達はもう一度、なぜ山や森が人々から崇拝されてきたのか再認識しなければならない。屋久島と人々の生活は深く結びつき独特の文化や歴史が生まれた。私達はその文化にこそ目を向けるべきである。

2. 羽鳥さん 昔の林業

江戸時代の林業は全てオノやカマなどを使い作業をしていた。その為とても危険で死者も多く、林業は命がけの仕事だった。機械などがない時代に先人達は多くの知恵を出し多くの技術を生み出した。木を運ぶにも川に流して運搬したり牛で運んだりしていた。こうした先人達の知恵や技術が人体の知恵となり現在の林業を支えている。

3. 山田さん マタギ文化について

現在のマタギ文化は消えつつある。狩猟とは異なりマタギは独自の文化を作り出してきた。その一つがマタギで得たものは神様からの授かりものだという考えである。その為決して乱獲はすることなく森の生態系を維持してきた。古い文化を学ぶことは小さな村や町にも輝いていた時代があったという事。その時代を伝えていく事が私の仕事である。

4. 石倉さん 受け継がれる山と森の思想

世界や日本の山岳信仰は古くからあり、様々な形が生まれた。十二本ヤスやシシ踊りなど山と人は生と死で繋がっており山はとても神聖で特別な空間であった。山は人々にとって特別な空間ではるかに長い時間軸がある。最後に山を知るという事は世界を知るという事、日々の営みがあるのは森があつてこそである。

2 参加者 印象に残った発言を簡略に記入してください。

Q1. このような文化を若い人たちに伝えていくにはどうしたらよいか？

A1. 世代によって伝えかたは異なり様々である。興味のあるイベントには人が自然と集まる。SNSや本屋さんなどでの宣伝など、まずは入り口をつくり、次に中に取り込む。中に引き込むようにこちら側がすればよい。また私達主催する側も様々なツールを利用すべきである。

Q2. マタギの観光資源化に違和感はないか？

A2. マタギの文化が伝わっていることを実際に見られる。地域をなんとかしなければいけないので、マタギは他にない資源。学びながら、伝え、それが地域振興につながればよい。

3 感想 参加して感じたことを箇条書きで記入してください。あなた自身を含めて若い世代が、これから森と関わっていくうえで参考になった点、また提案などありましたら記入してください。

1. 屋久島に古くからある岳参り文化にとっても興味がわいた。屋久島というどうしても世界遺産に目がいきがちだが、そのまわりの文化にももっと目を向けるべきだと思う。屋久島の人々に深く結びついてきた自然をもっと多くの人に知ってもらい、少しでも興味を持ってもらえる取り組みをしていかなければならない。その為にはやはり情報の発信が鍵になるのではないかと考える。SNSでの発信や屋久島に来る観光客むけのパンフレットなどに周辺地域の特集を組んだりするなど、周辺文化について知ってもらうような取り組み

みが必要だと考える。

2. 昔の林業を知るととてもよい機会だった。昔は今と比べ重機などはなく全てが手作業だった。現代のなんでも手に入るという考え方ではなく今あるものでどのようにしたらよいか考える。先人達は常に考えながら仕事をしていたという事がわかった。また、そこで生まれた技術や知恵が今の林業に深く結びついて、支えているのだと感じた。伝えていくには小中学生にアプローチすべきだと考える。社会の授業とリンクさせ、林業の歴史に触れてもらう事は子供達にとって考えて行動するという良い体験になる。
3. 山田さんの話を聞くまでマタギと狩猟は同じものだと思っていた。しかし実際はまったく別のものである事を知りとても驚いた。マタギは狩りで得たものは全て神様からの贈り物と考え乱獲は決してしないという。そのおかげで生態系が保たれてきた。しかしこの価値あるマタギ文化は失われつつある。私達はどのように残し伝えていくかとても大きな課題である。
4. 山岳信仰と聞いて難しいものだと考えていたが、話を聞いて私達の身近にあるものだという事を感じた。山と人々は深く結びつきその中で様々な変化を繰り返し受け継がれているという事は、その中で多くの生と死があったという事である。山は私達の中で特別な存在であるという事を改めて知った。石倉さんの話を聞いて山にはどんな歴史があるのかとても知りたくなった。

1 発表者・コーディネーター 印象に残った発言・報告を簡略に記入してください。

1. 柴崎さん

屋久島と人間の関わりは、17世紀中頃に始まり、薩摩藩への年貢として屋久島のスギを利用していた。信仰の点では、集落ごとに信仰する山があり、現在でも信仰が続いている集落もある。一方で、保護区と保護区外の地域では、保護の程度の差が激しく、保護区外では開発が進み、景観や生態系の崩壊が危惧されている。戦後の人間による過度な干渉は、屋久島の価値の多様性を減少させた。

2. 羽鳥さん

江戸・明治時代は光（電気）がない世界で、現代人には理解できない感覚で山仕事をしていた。時代によって使用する道具や動物が異なり、林業を主な生業としていない地元の人々が山で作業をしていた。現代の文化や考え方では、昔の文化を捉えることが難しく、その点について現代人は努力する必要がある。

3. 山田さん

秋田県の根子は「またぎ」の発祥の地である。資源的に限られた地域の中で生きていくための手段として、またぎは重要な位置づけにあった。またぎは狩猟する熊や鹿などを山の神様からのさずかりものと考え、神様や自然と一体となった生活を営んできた。現在は急激な人口の流出によって、またぎの伝承が難しくなっている。

4. 石倉さん

山と町とで祭る神様が異なる形態をもった国があり、多様性がある。日本の東北地方には、奇怪樹信仰やシシ踊りなど、山の神に対する信仰の形態に多様性があり、地域の人々はそれぞれの信仰とともに生活をしてきた。山と森は単に人間が生きていくために必要な資源を提供してくれる場だけでなく、人間の思想と山をつなぐ特別な空間である。今後は、それらの伝承を再確認する必要がある。

2 参加者 印象に残った発言を簡略に記入してください。

1. 思想や信仰などのマニュアル化できない精神的なものをどのように伝えていけばいいか？
→世代ごとに感じ方・捉え方が異なるため、世代を超えて伝承できるものと、そうでないものに分けて考えていく必要がある。時代によって変わっていくものはもちろんあるが、長期的に持続していく思想も存在しており、それらについて研究する必要がある。

3 感想 参加して感じたことを箇条書きで記入してください。あなた自身を含めて若い世代が、これから森と関わっていくうえで参考になった点、また提案などありましたら記入してください。

1. 先人たちが残した文化や信仰、思想の重要性を考えさせられた。
2. 山や森と人間の関わり合いの多様性を感じた。
3. 多くの思想や信仰があるが、現在それらの注目度は低く衰退しているという印象を受けたが、それらの思想や信仰に込められている意味を見つめなおす必要性を感じた。
4. 現在、森林に対して多くの機能の発揮が求められている中で、今回のお話で思想や信仰の重要性を知り、森林に対して文化的な機能の発揮も重要な課題と感じた。また、その評価方法の確立も重要であるが、難しい課題だと思った。
5. 私たちのような若い世代からアクションを起こす必要性を強く感じた。

第4分科会【デザイン】 森×デザイン×森

参加者数 24 人

森の「抗えない魅力」の謎をデザインで解く

森の存在を街の暮らしに活かすユニークで美しいデザインを通して、新たな森への扉を探求します。地域の人たちをつなぎ、街の木を使った暮らしの道具をつくる活動、里山の植物を都市に移植する緑化事業、森の印象を写しとることで「森の」存在を再定義するようなアート制作など、どの取組も、森と人との新たな関係をデザインするものです。

湧口 善之 マチモノ〜街の木を活かすものづくりの会代表

建築家で木工。「いまここにあるものでつくる」をテーマに国産材によるものづくりに取り組むなかで、私たちが暮らす街にも多くの木があること、山にもないような大木がたくさんあること、それらの木々が毎日のように伐採され、ゴミとして捨てられていることに気付き、街の伐採木活用の取り組みをはじめ。これまでに約100樹種、30cm径×2mの丸太換算で約200本分の伐採木を回収・木材化し、街の暮らしに還元。小物雑貨から家具・建築まで、木の伐採から製材、製作、植樹まで。木に関わる様々な専門家と協業しながら街の木のあり方を問い直し、暮らしのなかで自ずから生まれてくるデザインを目指して活動している。

宮田 生美 株式会社 ゴバイミドリ代表

1991年から(株)アネックスに所属し、旧住宅都市整備公団(現UR都市機構)のニュータウン開発など公的セクターの街づくりや地域計画のコンサルティング業務に従事。この中で、ランドスケープデザインや環境計画に携わる。コンサルティングだけではなく実際に街に緑を増やすことを企図して、2003年、5×緑(ゴバイミドリ)プロジェクトを立ち上げ。2013年(株)ゴバイミドリ設立。代表取締役就任。「ウーマンオブザイヤー 2010」受賞。

木村 崇人 現代美術作家 地球と遊ぶプロジェクト

1971年生まれ。愛知県出身。東京藝術大学大学院博士課程修了。Ecole Supérieure d'Art et de design de Reims(フランス)卒業。「地球と遊ぶ」をテーマに地球や自然の见えない力を知覚化、視覚化させる作品を制作し、世界に発信している。主な展覧会に「森を遊ぶ・木村崇人展」アサヒアートコラボレーション(2008)、「木村崇人と宮崎で地球と遊ぶ」宮崎県立美術館(2013)、越後妻有アートトリエンナーレ、瀬戸内国際芸術祭、あいちトリエンナーレ。「Light Project V」Kulturhuset Vit Skolan/スウェーデン(2013)、中房総国際芸術祭 アート×ミックス(2014)、Rivers Project Kaohsiung Pier-2 Art Center/台湾(2015)「ここに棲む〜地域社会へのまなざし」アーツ前橋/群馬(2016)

コーディネーター

落合 俊也 森林・環境建築研究所

1959年 東京都国立市生まれ。1987年早稲田大学大学院理工学研究科修了、同年(株)杉坂建築事務所入所し、木造で実現するエコロジーコンシャスな住宅、パッシブ設計を追求する。2014年春、杉坂建築事務所より独立し、(株)森林・環境建築研究所を創立。森林共生住宅を提唱し、森林環境を住居に写し取る究極の木の家づくりを探求している。受賞:建築・環境省エネルギー住宅賞、サステナブル住宅賞最優秀賞・国土交通大臣賞他。

|| 報告

松下 芳樹

NPO 法人森づくりフォーラム理事

この分科会のねらいは、森の存在を街の暮らしに生かすユニークで美しいデザインを通して、新たな森への扉を探求することと設定されている。

そのための具体的な切り口として用意された事例は、まず、暮らしの中で実際に触れて利用する家具やインテリアの製作を取り上げ、続いて、街の中に小さな里山環境を創造する造園事業に注目し、最後に、私たちの感覚的な世界の中での森の捉え方を提示する現代アートに触れるという、それぞれ違った角度からのアプローチであった。

これらの事例は、それぞれの活動や個人の経歴や背景などの理解を踏まえないと、今回の分科会が提示する「デザインの力」は見えてこないことから、発表時間を長めにとって、そのあとに参加者のグループでの討議により、それぞれの活動の提示するものについて意見交換を行うこととした。

湧口氏の発表は、地域の人たちをつなぎ、街の木を使った暮らしの道具をつくる活動である。建築の仕事をした頃は、スギ・ヒノキの国産材を使った在来軸組みの家づくりの設計・施工をしていたが、その工法だとお金がかかって割高になり、時代にあっていないのではないかと考えていた。その頃、飛騨高山で家具づくりを学ぶ機会を得て、高山に一年間移り住む。そこで広葉樹等を含む様々な樹種について学んだが、東京に帰ってくると、街の中にも多くの樹種と大径木があり、それらが人・街の都合で毎日のように伐採され産業廃棄物として処分されていることを知った。そこで、それら街の木を活用した家具やインテリア、小物などの製作に取り組む。街路樹や緑化木などは、山からの木材にはない多種多様な樹種があり、木材の性質も多様で、これまでの経験知もないことから、実際に材料として利用するには実経験と技術の

積み重ねが必要だったとのことである。そのような木の性質から製作できる作品には限りがあったが、それを踏まえた暮らしの中で使用できるもの、暮らしの中で自ずと生まれてくるデザインを生かして製作するようになった。



また、その木が街で育ってきた歴史と街との関わりの記憶までも、その作品の中に反映しようとすることで、製作された家具や小物は、暮らしの中での単なる道具としての使用価値以上のものを持つことになる。

この活動から、さらに街の木が持つ課題に気づく。街の木を増やそうという意見は多いが、実際に植えられた樹木には維持管理が必要であるし、邪魔になり伐採しようとするとは今度は反対する人も多い。しかも残せという人はその経費を払わない人がほとんどである。そのため、街に木を残そうとしても、そのオーナーにとって木は負債になる可能性が高い。これを負債ではなく資産に出来ないかと考え、伐採した木を使った木工体験や、街にある木の実を使った食体験などのイベントを開催し、住民の意識を変えようと試みている。都市の木をどうやって残していくのか、どうやって暮らしの中に生かしていくのかについてのこれまでにない本格的な活動の報告であった。



次に、宮田氏の発表は、里山の植物を都市に移植して里山環境を再生する緑化事業の活動である。最初は、企業等で街づくりや地域計画のコンサルティング業務に携わっていたが、自宅の玄関スペースの緑化を専門家に委託したことがきっかけで、実際に自然度の高い緑を増やすことの可能性に目覚め、それから発展して、ゴバイミドリ（5×緑）という会社を立ち上げた。実際には、里山地域と連携して、在来の植物を使って都市の緑を増やす仕事をしている。工法的には、人工軽量土壌とカゴ・金網を使った手法により、都市の家は外構が狭く、緑が少なくなりがちであるが、住宅と道との間の狭隘な場所や建物の屋上緑化などでも雑木林のような木々を植えることができる。このような複層の緑を造成すること（5倍＝5×）で、里山植生の復元は可能である。里山の植生を復元するのは、都市に里山の景観を再生したいためであり、都市の暮らしに季節を取り戻すことがテーマである。この取組みの中で、在来の植物を調達する必要がある、里山地域との連携が始まった。都市の緑化用に里山の植物を里山地域から調達し、里山地域はそのために里山の植生を管理・再生するという関係である。木材を生産する山側では、これまで、在来の草本・広葉樹は駆除すべきものであって、それらを保全管理するという発想はなく、新たな森林管理を行うことになった。また、湧口氏の話にもあったが、都市の緑には維持管理がつきものであるが、このメンテナンスを手間・コストと考えることをやめて、「丹精を込める相手がいることは豊かなことなんじゃないか」と

いうようにメンテナンスの考え方を変えていこうとしている。その一環で、都市の里山の維持管理については、落ち葉は再利用し、除草は外来種のみとして、その作業はワークショップにして実施するなどメンテナンスをイベントにしている。外来種のみを除草するだけで植生は大きく変わってくるし、緑化木の剪定のやりようによっては、里山景観を維持できる。このように里山の景観を都市の緑で再現することにより、風景は人々の日々の営みの積み重ねでできていること、すなわち、「人が風景をつくるということ」を実践している活動の報告であった。



午後からの木村氏の発表は、午前中の発表とは異なり、経済活動とは距離を置いたものである。今回の発表の中心は、森の印象を写し取ることで「森」の存在を再定義するようなアート製作であった。



本来は、地球の自然の见えない力を知覚化、視覚化させる作品づくりを行っており、「地球と遊ぶ」ということをテーマとしている。これまでに、光や重力、風といったものを扱ってきており、1998年からは木洩れ日プロジェクトを行っている。木洩れ日の形は○だが、これは太陽の形（光源）が○だからで、木々の葉の間がピンホールカメラの役目をして地上に木洩れ日が○になって写しだされる。その証拠に部分日食の時の木洩れ日は三日月形の太陽を写して三日月形の木洩れ日だった。これまでに光源を星形やハート型にして木洩れ日を再現するような作品づくりをしている。風を扱った作品としては、瀬戸内芸術祭で女木島の港にカモメの風見鶏を展示している。実際に近くに止まっている鳥と同じ方向を向いているが、元来、鳥は風上を向いて止まる。このようにイメージを伝えるために体験型にしている。「遊び」とは、まず「実験」して、「観察」をして、何かを「発見」するということ。森との直接的な関係は、2008年からアサヒビールの森での取り組みからである。現在は、山梨県の早川町に住んでいるが森が96%を占める町である。森を知ろうとしたが、痛感したのは手に入る情報と実際の森の現場とはズレがあることだ。山を知れば知るほどその抱える問題は重い。何ができるか悩んでしまった。遊ぶところではないという気持ち。そこでとにかく森の表情を表現することにした。作品としては家づくりに合わせて森を表現するとか、コンセプトボンサイなど。森はそれを構成する植物たちが光を奪い合いで戦っている。森をいかに楽しむかを考えた時に、まずは森に興味を持ってもらうことではないか。そういう切り口であればアーティストとしてのアプローチの仕方はあると思う。今日は、実際に小さな木洩れ日の再現装置を持ち込んで、参加者がそれぞれに光源の形で変わる木洩れ日を再現してみるという体験型の報告となった。



それぞれの発表の後の意見交換とその紹介では、落合氏がコーディネーターを務めた。まず湧口氏の発表についての意見としては、街の木をうまく使えるようにする仕組みづくりだ。その木の持つ物語をワークショップにどのように生かすのか興味がある。といった発言があった。宮田氏の発表については、コンクリートが多いのは都会だけでなく田舎も多い。最近では身近な緑があっても気づかなくなっているのではないかと。といった意見があった。木村氏の発表については、アートは森を知るための入り口になるのではないかと。アートにすることで、特に体験型にすることは子どもから大人まで興味を拡げることができ、五感で体験することは後まで残るので良い。森は木を切って売ることしかないと思っていたが、それ以外の価値もあるのではないかとこの認識ができた。といった意見があった。



コーディネーターからは、湧口氏の活動は、木の魅力の先に森がつながっている。一般の人はこれをよく知らない。この関係をうまくつなげている活動だ。宮田氏の活動については、緑化における多様性をうまくバランスよくデザインできている。木村氏の活動については、午前中の2件の発表が経済を考えたうえでの発表であるが、アートの話には経済性を考慮しなくてもよいというのが違いではないか。とのコメントがあった。

これについての発表者のコメントとして、湧口氏は、特にゴバイミドリの話を聞いて、改めて、緑が邪魔者になっているのを変えていくべきと思った。緑を負債から資産へ変えるために、所有者に負担させるのではなく、その費用の支払先を変えることが重要であり、そのための活動をしたい。経済的に成り立つことは重要なので、ちゃんと経済性がある活動にしていきたい。との話があった。宮田氏からは、特に、コストを含めメンテナンスについては、楽しく解決していくことが大事である。在来植物を里山から調達することで、雑草と思っていたものが、どのように街で使われているのか、その価値が分かれると山側の考えが変わってくるのがわかる。街の緑の再生と里山の再生が繋がればいいと思う。自分の仕事の結果で緑が増えればよく、少しでも世の中のためになればよい。ビジネスとして成立しなければ安定しないし、山の生業の一部にもなれない。というコメントがあった。木村氏からは、アートはそもそも誰かが儲かるということから始まっていない。人の気持ちをどのように動かせるかということで始めている。自分からは経済にはかかわらないが、活動としてはいつも決められた予算の中でやっている。というコメントがあった。

以上のように、今回用意された発表事例は、単なる木工クラフト、造園業、アーティストの活動紹介というものではなく、それぞれに「森」というものが持つ多様性の中から、これまでになかった視点で、その多様性の一部を切り取り、これまでになかった価値観をもって、私たちの暮らしの中の一場面として再現している

事例である。このとき、「デザイン」は単なる視覚的なもの、感覚的なものを越えたものを提供する。それは、湧口・宮田両氏の事例では、価値創造として、木や植生に新たな「使用価値」をもたらしているが、さらに、使った木や再現した里山が物語を持つことで、その使用価値をも越えたものになりうる。しかし、そこには必ず現実の経済的な業として成り立っているかどうかが付随してくる。一方、木村氏の事例は、最初から経済性を意識していないものであり、生活者の意識の面での新たな価値の発見につながるものである。それは、直接的には経済性を伴うものではないが、その影響を受けた価値観が生活の中での価値の選択、それを具現化した商品や暮らしぶりの選択を通じて現実の経済社会につながると言える。これらの事例が提示する新たな発想は、制約のある中でのものであったり、制約のない自由な発想によるものであったりするのだが、そこにはそれぞれに新しい価値の発見があり、それが森と人との関係についてのものであることから、それは森と人との新たな関係性をデザインするものであり、まさしく、森の「抗えない魅力」の謎をデザインで解くことといえるのではないだろうか。

最後に、このような新たな価値創造の取組みが拡がり、私たちの暮らしの中で森や木をうまく生かしていく経験が、社会全体でいかに森をガバナンスするかという命題につながることを期待したい。



1 発表者・コーディネーター 印象に残った発言・報告を簡略に記入してください。

1. 山の中だけが林業じゃない
2. 林業とアートは合わせることができる
3. 風景は人々の日々の営みの積み重ねでできている

2 参加者 印象に残った発言を簡略に記入してください。

1. 活動はしっかりとお金になっているのか
2. 川上の活動がここまで広い分野でされていて勇気出た
3. 生産者としてできることは何か

3 感想 参加して感じたことを箇条書きで記入してください。あなた自身を含めて若い世代が、これから森と関わっていくうえで参考になった点、また提案などありましたら記入してください。

1. 林業と他のジャンルの組み合わせはまだたくさんある
2. どのように付加価値を付けて木を販売するのか
3. 林業の知識だけでなく幅広く知ることの大切さ

1 発表者・コーディネーター 印象に残った発言・報告を簡略に記入してください。

1. 湧口さん

街にある広葉樹は樹齢が高く大きな木でさえも容赦なく伐採され、切られた樹木は廃棄物として捨てられる。こういった樹木を使って「自分で製材」「樹皮で染色」「どんぐりや実を食に活かす」といった様々なワークショップを開催している。さらにこういった街の木から椅子やカトラリーといったものも制作している。製材は広葉樹を取り扱う製材所が少ない、置くコストが高い、人工乾燥の設備がないといった理由から岐阜や青梅の製材所で行っている。

街の樹木は種類が豊富なおうえに虫食いや腐れ、曲がりといった欠点や癖が強い。そのためデザインを決めてから制作するのではなく、ある素材をどのように生かして制作するかが鍵である。そうして思い入れのある樹木を形に残してやることで、樹木を人の負担ではなく資産にして循環させるシステムをデザインしていくことを目指す。

2. 宮田さん

暮らしに季節を取り戻すことを目的に、「里山と提携して日本の在来植物で都市に緑を」をコンセプトにして庭園や建築の緑化「5×緑」を行っている。金網のカゴに土壌と植物を植えそれを設置していくため、土壌の交換がいらないうえ既に施工がすんだ庭園や新たに植物を足したい場所にも設置ができる。また、どんぐりキューブという小さな鉢植えを製作するワークショップや5×緑の学校という形で、子供たちや高校生が自然と触れ合う機会を提供している。

風景を作るツールの提供によって、人々に町の風景を作るのは自分なんだということを知りパブリックマインドを得て欲しい。メンテナンスが手間という考えではなく丹精を込めることは豊かだということを知ってほしい。5×緑はその思いで「人が風景を作るという事」をテーマに2016年は活動していく。

3. 木村さん

「地球と遊ぶ」をテーマに作品を制作している。森林はあまりに大きくまた、深い問題を抱えているため遊ぶことなんてできないと最初は思ったが、実際に森に入っていくうちに木漏れ日や使われなくなった山小屋を使って作品を制作するようになった。森の中に落ちているものは、時間の経過が凝縮されているものでありそれも芸術の一つになる。

3 感想 参加して感じたことを箇条書きで記入してください。あなた自身を含めて若い世代が、これから森と関わっていくうえで参考になった点、また提案などありましたら記入してください。

身近にある木や植物が、森林に通じていることが森林の価値を見直す第一歩となることがわかりました。緑に癒されたい人、環境の保全に貢献したい人、コンセプトアートに興味がある人、木工品が好きな人、自然食品が食べたい人、といった様々な興味を持つ人達の目を森林に向けさせる多彩なデザインのシステムが森林の抱える沢山の問題解決の新しい鍵になり得ると思います。

ただこのプロジェクトの意図が参加者に伝わっているかが分かりづらく、ただ「面白かった」で終わってしまう可能性があるため、いかに興味を持ってくれた人をつなぎ留めるかがこれら三つのプロジェクトに共通するこれからの課題であると考えました。

第5分科会【エネルギー】 電力自由化、はじまる

参加者数 20 人

「木質バイオマスの可能性をさぐる」

バイオマスエネルギーについて考えます。とくに、最近話題の木質バイオマス発電をめぐる現状と課題について検討します。また、炭をめぐる国内の状況とあわせて、世界の炭やき事情を紹介します。

相川 高信 自然エネルギー財団

京都大学大学院農学研究科修士課程修了(森林生態学)。三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社を経て、2016年6月から現職。専門は、バイオマスを中心としたエネルギー政策、森林・林業政策。地域主導型のバイオマス事業化の支援も行う。2016年3月に北海道大学大学院農学研究院より博士(農学)を取得。

大石 英司 みんな電力株式会社 代表取締役

1969年、東大阪市生まれ。広告制作会社、PCソフト開発会社を経て凸版印刷へ入社。電子出版・有料デジタルコンテンツ流通の先駆けとなる「ビットウェイ」の起案・事業化、「原宿スタイルコレクション」「IKKO 美脚革命」などのプロデュースを行う。2011年、「みんな電力株式会社」を設立。小型ソーラー充電器「てのひら発電空野めぐみ」の開発・販売、太陽光やバイオマス発電の設置・コンサルなどの他、「顔の見える発電所」をテーマに電力小売り事業を行う。

広若 剛 国際炭やき協力会事務局長

国際炭やき協力会事務局長 91年から岸本定吉、杉浦銀治、須貝稔を師とし、インドネシアをはじめとする世界各国および日本の各地で炭やきの技術協力事業に参加。最近は炭を土壌改良材として使いながら炭素固定をするクールベジタブル農法の普及に取り組む。1964年宮崎県生まれ。山の中で汗をかくことと飛行機に乗って遠いところに行くことが大好き。あ、最近は船もか。

|| 報告

山田 隆信

NPO 法人森づくりフォーラム理事

この分科会は、「電力自由化はじまる～木質バイオマスの可能性をさぐる～」をテーマにした分科会である。まずは、「電力」をテーマに、4月から電力自由化がスタートし、自分たちで電力を選べるようになったが、森林に関心を持つ消費者としてどのような選択をすればよいのか、また木質バイオマス発電所の現況はどうなっているのかを、2人の発表者から学び、参加者で議論することを午前の部とした。そして午後の部を「炭」とし、今回の「森林と市民を結ぶ全国の集い」のテーマの「温故知森」を一つの切り口に議論することとした。

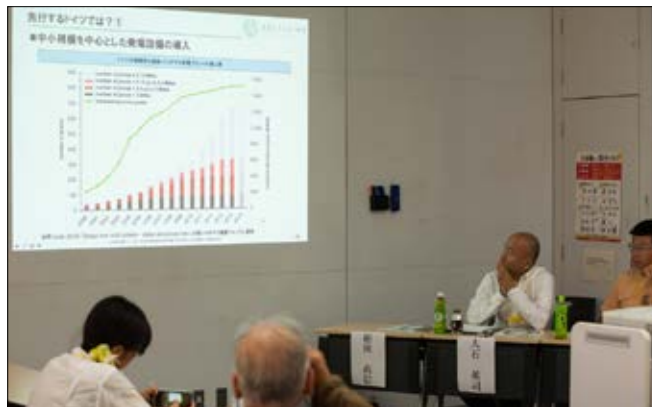
冒頭、司会の久保田さんから、FIT制度によって木質バイオマスの燃料利用が進められているが、専焼発電所では大量の木材が必要となり、計画されている全木質バイオマス発電所がすべて稼働した場合は、過剰伐採が懸念される。しかも、燃焼効率が低いため発電利用は有効なのかどうか。また、前回の集いでは「薪」を取り上げたので今回は「炭」を取り上げたとのコメントがあった。

最初に、「コンセントの向こうの顔が見える電力会社」をテーマに、みんな電力株式会社の大石さんから、電力自由化について、みんな電力株式会社の取組について報告があった。

この4月から始まった電力自由化で、いくつかある小売り事業者の特徴を整理すると、「価格重視」、「特典重視」、「再生エネ重視」の3つに区分される。さらに大きく分けると、購入する電力を「価格重視」なのか「持続可能性重視」なのかを、消費者が選べるようになったということである。「持続可能性重視」であるみんな電力株式会社は、価格競争に陥りがちな電力販売に新たな付加価値を加えるため「顔が見える電力会社」を切り口に消費者に示している。野

菜生産者の顔が見えるスーパーのように、「ホームページ上で発電関係者の顔写真を載せる」事で、コンセントの向こう側の顔がわかるようにし、応援したい発電所の電気を買える仕組みにした。「顔が見える電力」にもいくつかのタイプがあり、市民電力応援型、地産地消型、復興支援型、面白いものではタレント応援型がある。今回は木質バイオマスエネルギーがテーマであるから環境にやさしい再生可能エネルギーの「環境貢献型」となる。また、応援したい再エネ発電所を選ぶと料金の一部が支援される仕組みも提案している。

ところで、今回の電力自由化により、分科会参加者の中で、新電力に切り替えた人は一人もいなかったが、みんな電力株式会社の取組のように、単に電力を選択するだけでなく、発電所、発電方法を応援することができるようになったことで、木質バイオマス発電所を選択することで、日々の暮らしの中での新たな森との関わり方となることがわかった。



続いて、自然エネルギー財団の相川さんから、「日本の木質バイオマス発電の課題」について発表があった。

冒頭に「第1回全国植樹祭」ではげ山に植林をする写真を示し、日本でも戦前は薪炭利用が多く、特に戦中は過剰な伐採がされ、その結果はげ山を多く作ってしまったという課題を示した。

エネルギー革命後、薪炭利用は少なくなったが、今は固定価格買取制度 (FIT 制度) 導入により木質バイオマス発電施設が全国各地に急増し、間伐材など

が電力利用されるようになっていく。FIT 設備認定を受けた木質バイオマス発電所では、スギやヒノキの間伐材や伐採残渣などの「未利用木材」は32円/kW、製材端材や輸入材などの「一般木質」は24円/kW、産廃木質が13円/kWと売電価格が20年間固定される。そのため、九州など木質バイオマス発電所が多数建設されたところでは、燃料用丸太の価格が上昇している。

このように、木質バイオマス発電所が建設された地域では、いきなり年間数万tの燃料用チップが必要となる。価格が固定された20年間はよいが、20年後のFIT 終了後にはいきなり0になる可能性もある。また、輸入材について海外のペレットやチップ生産業者の日本市場への関心は高く、増加する需要に対して、伐採量を増やして対応するのか、輸入するのか、またこれが本当の意味での中山間・林業振興になるのか等、今後の動向に注目が必要である。

一方で、火力発電所の発電効率は悪く、熱の大半をロスするため、熱も利用することで全体の効率を上げていく必要がある。しかし、熱は遠くに運べないので必然的に中小分散型のシステムになる。FIT 先進国のドイツでは中小規模の電熱併用システムが増加しているが、日本での導入は課題が多い。

世界では世帯ごとの使用エネルギーの大半が熱利用である。しかし、日本にマッチングした木質バイオマスエネルギーの熱利用は技術、システムともにこれからであり、各地で様々な取組が行われており、今後の発展に期待したい。

二人の発表を受けて、コメンテーターから次の発言があった。

今回は「温故知森」がメインテーマであり、この分科会はエネルギーがテーマである。専門性が高く、制度や専門用語を理解するのに時間を要してしまうが、市民目線でエネルギーを考えたい。

エネルギー革命が起こる前は、薪や炭を燃料として日常的に使っていた。これによって、萌芽更新する雑木林が適切管理されていたとされているが、過

度の伐採が行われるとはげ山になってしまう。今回のFIT 制度では、スギやヒノキなどの人工林の未利用部分が対象で、管理されるのは針葉樹人工林だ。FIT 設備の増加により過剰伐採が懸念されているが、今も世界の木材利用の半分は燃料利用である。後進国の燃料利用が多いが、先進国でも木材の15%が燃料利用されており、日本は2.5%と極めて低い。熱も含めて、もっとエネルギー利用されてよいのかもしれない。

また、木質バイオマス発電による電気は、一般家庭で選択できるようになったが、まだ周知が足りてないだけでなく、木質バイオマス発電の質まで着目されていない。本当に地元の未利用材を有効利用した山間部の木質バイオマス発電所と、石炭や輸入材を主燃料として地域の木質バイオマスを一部混焼するような海岸部の木質バイオマス発電所とは区分されてなく、どちらが地域の再生可能エネルギーとして貢献しているのか、どちらの電力を消費者として選択したらよいのか、その手段はあるのかも不明である。

しかしながら、電力を選択することで、間接的にせよ森林管理に寄与することができるようになったので、森林に関わる市民として賢い選択ができるように勉強していきたい。また、今後は特に熱利用の技術開発に期待していきたい。

午後の「炭」の部は、「最近の炭の利用は、エネルギー利用ではない。」との衝撃的な一言目から始まった、国際炭焼き協力会の広若さんの発表は、炭の利用や、国際協力の話など多岐にわたる興味深い内容だった。

木炭は世界170か国以上で生産されており、その地域伝統のやき方・使い方が存在し、年間生産量は7000万トン以上である。日本も年間200万トン以上を生産していた時代があったが、現在の生産量は年間約2万トンである。日本の木炭生産量は減少したが、素材をその性質と用途に合わせて生産する日本の炭生産技術は非常に優れている。

日本では、かつて炭は料理や暖房等にエネルギー

利用されていたが、戦前をピークに減少した。今は、一般家庭では純粋なエネルギーとして日常的に使われず、レジャーとしてのバーベキューや炭火料理の店等で利用されている。エネルギー利用以外の用途として、土壌改良剤、水質改良剤などの利用が増えており、特に一般家庭では脱臭炭や調質材や料理に利用されている。

また、炭は炭素の塊でもある。午前の発表では、木質バイオマスを発電や熱利用すると結局大気に二酸化炭素が放出されるが、炭を森林土壌や農地に入れることで、炭素固定ができ、地球温暖化防止にも貢献できる。

午前、午後それぞれの発表の後、質疑応答の時間をとり、参加者の認識を深めるとともに議論が深まった。



市民目線で「エネルギー」を考えた時に、我々の森との関わり方は「火」から「電気」へと形を変えた。現段階では電力自由化、木質バイオマス発電に関する情報は少なく、また我々の認識も十分ではない。日本の森林・林業でなにが起きているのかをしっかりと理解したうえで、森林の電力利用という新たな森林との関わりとして考えていきたい。

また、「炭」もエネルギーとしての利用は減ったが、別の形で私たちの暮らしの中でより身近に活用されている。全体テーマの「温故知森」を考えるに、ふさわしい分科会であった。

1 発表者・コーディネーター 印象に残った発言・報告を簡略に記入してください。

1. 大石さん

「コンセントの向こうの顔が見える電力会社」電源構成の開示は当然として、発電所運営者の「顔・由来・思い」を見える化。タレントの設置した発電所で、若者などの取り込みも。バイオマスは松阪からの買取を本年開始予定で、松坂ツアーの構想も。

2. 相川さん

木質バイオマス発電の経費の7割は燃料代であり、FIT期間終了後にどう維持するかは不明。先行するドイツは中小規模熱利用が中心。地域の技術を活かしたアライアンスモデルで、安価で木質ボイラーを設置する取り組みを推進中。

3. 広若さん

木炭はエネルギーとしてはほとんど使われていないが、多くの利点がある。グルメ燃料や活性炭だけでなく、微生物の増殖効果を活かした土壌改良材としての利用に注目。公園で炭焼きをして、熱供給しながら植物を育てる「熱炭供給」の提案。

2 参加者 印象に残った発言を簡略に記入してください。

1. 大規模なバイオマス発電所が乱立状態で、原木供給に大きな問題がある。「無政府状態」とも言える状態に映るが、行政はどのように対応しているのか。
⇒県職／「発電所の認可プロセスに林務が正式にタッチできていないのが現状」
2. 輸入バイオマスとしてどのようなものが入ってきているのか把握できているのか。
⇒相川さん「輸入バイオマスの実態の全体像を把握できている人は恐らくいない。北米のペレットは高いがクリーンな原料。東南アジア系は安いがヤシ殻など環境的にグレー。」
3. 木質バイオマスは、ボランティアにとっては、間伐材の有効利用につながる。
4. (鹿児島県の方から)繁茂する竹の有効利用法について教えてほしい。
⇒「鹿児島には竹紙製造のために竹パルプを扱う会社がある。」

3 感想 参加して感じたことを箇条書きで記入してください。あなた自身を含めて若い世代が、これから森と関わっていくうえで参考になった点、また提案などありましたら記入してください。

1. 森林ボランティア系のイベントには、今回初めて参加させて頂きました。これまでにつながりのなかった皆さまと関わることができ、大変貴重な機会でした。会場からも発言があったように、参加者の高齢化は大きな課題ではありますが、一方で若者の様々な訪問で活躍を始めていることを知り、私も若者の一人として頑張っていこうと思いました。
2. 西村さんの講演で話していた「やる意味が感じられる仕事が少なくなっている」というコメントに共感しました。人生の貴重な時間を仕事に使うわけですから、生きがいを感じられる仕事をしたいと切に思います。その意味でも、森林・林業に関わる仕事は、次の世代が安心して住める世の中を作るために必要不可欠な、やりがいの大きい仕事だと思います。
3. もともと木質バイオマスに興味があり、今回エネルギー分科会の若者レポーターとして参加させて頂きました。専門家の講演を聞き、改めて木質バイオマスの熱利用に対する思いが強まりました。持続可能な社会に向けて、エネルギーの地産地消にライフワークとして取り組んでいきたいと思っています。

1 発表者・コーディネーター 印象に残った発言・報告を簡略に記入してください。

1. 大石さん

電力を選択するだけで、新しい価値を社会に生み出す「顔が見える電力会社」
消費者が電力を選択するとき、損をするというのは勿体ない。コンセントの向こう側にある電力会社をこれからは選択する時代にあり、それが地域貢献・振興の一つとなる(電力会社や一個人が電力を売買する時代→電力を買うことで、ふるさと納税のようなノベルティが付与)。

2. 相川さん

バイオマスエネルギーをただ選び利用するだけでは、燃料であるはずの木材や森林・林業に悪影響があるのではないかと。これを主目的とし、世界的なバイオマスの背景から我が国の現在のバイオマス利用の状況を概観した。

現在、再生エネルギーへの投資が増加傾向にある中で、バイオマスエネルギーの投資コストは他エネルギーと比較して横這いのままである(他のエネルギーは減少傾向)。また、地域でバイオマスエネルギーを利用するときは、地域内での多様な団体と連携し、循環できる利用のあり方を考えていく必要がある。

3. 広若さん

炭というものを日常で利用するエネルギーとして考えていいのか、というのは課題として考えている。ただし、里山や環境を考えた利用といった面では、炭は有効に利用できるのではないかと。

炭自体のエネルギー密度は高いものである。また、燃焼時のパフォーマンス変化も大きい。
地域振興という点で、炭を利用した熱利用循環の方法も考えられてきている→地域内循環。

2 参加者 印象に残った発言を簡略に記入してください。

1. 山形県在住のため、山形県の森林について質問。現在、バイオマス発電の建設が増加傾向であり、また規模も大規模なものである。この背景として再エネの急増であり、またバイオマスエネルギーのバブル化兼売り手市場だと考えている。このような中で、木材資源・森林資源といった燃料の争奪が起これば、山ははげ山になってしまうが、どのように考えているのか。
2. 輸入バイオマスの実態はどうなっているのか。理解ができない。
3. 未利用間伐材というものの基準はないのか。本当にC・D材なのか。
4. 竹と炭のあり方。里山の管理問題と竹林整備の課題。炭利用でどうなるか。

3 感想 参加して感じたことを箇条書きで記入してください。あなた自身を含めて若い世代が、これから森と関わっていくうえで参考になった点、また提案などありましたら記入してください。

1. エネルギーのポテンシャルは高く、これからの発展が期待される。その一方で、多くの課題(設備投資のコスト高、燃料確保の問題、森林整備・管理問題)があるため、その対応策等を考える必要性があると感じた。
2. 事例発表の1つに消費者の選択から地域振興につながるものが挙げられていたが、これを利用して山側にある生産者側に何かしらの還元ができないかと感じた。質疑応答において里山管理・整備の問題も多く挙げられており、生産者側の視点やそのための対応策について提示していくことが必要だと思う。現在は技術面に特化した構想やシステムが多く考えられているため、今後は生産から消費・川上から川下といった多段階的なエネルギー利用とその規模を視野に入れた調査・研究をしていくことが大切である。この調査・研究を私たちのような若者が現地に赴き、たくさんの方の事を学び、地域や社会に貢献できるよう努力を重ねていくことが重要だろう。

報告

「森林と市民を結ぶ全国の集い2015 in 福島」 ～東北復興に果たす森林の役割と市民活動～

本宮 滉也 フクシマ環境未来基地

■ エクスカーションで福島の実地に学ぶ

昨年行われた「森林と市民を結ぶ全国の集い2015 in 福島」の報告をいたします。

2015年6月12日(金)～14日(日)の2泊3日で行われました。開催場所はエクスカーションごとに、いわき地区、県南地区、相双地区、会津コースの4コース。全体会は「ふくしま県民の森・フォレストパークあだたら」を会場にして行われました。

私は、若者レポーター兼事務局スタッフとして参加しました。

2011年の東日本大震災は、被災した東北地方に甚大な被害を及ぼすとともに、これからの人々の暮らしのあり方について様々な課題を提示しました。「森林と市民を結ぶ全国の集い2015 in 福島」では、復興に向けて今も大きな困難(地震、津波、原発、風評等)に直面している福島県の現実を学び、地域の発展に森林がどのような役割を果たすことができるのか、福島県の復興に向けて、森林ができること、私たちができることは何かを全国の仲間と共に考える。こうした開催趣旨もとに行われました。

福島開催は2泊3日で行われました。じっくりと各コースのエクスカーションについて学ぶことができ、満足感の得られるスケジュールになっていたと思います。

エクスカーションは4つのコースに分かれて、各コース大テーマのもとに、それぞれのコースを回りました。大テーマは、

①いわき地区は市民参加による里山再生と森林環境教育の取り組みについて



本宮 滉也さん

- ②県南地区は大規模開発跡地の、市民による再生の森づくり
- ③相双地区は津波防災林の復旧への取り組みと原発事故の対応
- ④会津地区は自然エネルギーの里と森林づくりです。

エクスカーションごとにどのような内容や活動場所、視察として訪れたのか紹介します。

報告 「森林と市民を結ぶ全国の集い2015 in 福島」～東北復興に果たす森林の役割と市民活動～

① いわきコース



- ・ 津波被災海岸防災林の視察と植林活動
- ・ 里山再生整備の現場視察
- ・ 湯の岳山荘周辺の森フィールドの視察
- ・ 栗園跡地再生整備予定地の視察

② 県南コース



- ・ 白河市白坂里山再生整備状況視察
- ・ 南湖森林公園視察
- ・ 赤面山現地視察

③ 相双コース



- ・ 農林地除染の状況
- ・ 松川浦周辺における植林ボランティア
- ・ 南相馬ソーラーアグリパーク視察

④ 会津コース



- ・ 木質バイオマス発電視察
- ・ 悠遊の森(美しい背あぶりの森をつくる会)の活動地視察
- ・ 背あぶり山散策

それぞれのコースごとに、その地域で行われている取り組みや課題を知り、自分の目で見て体験することでもできる有意義な時間となりました。

そして、全体会では、若者レポーターからの各エクスカージョンの活動報告として各エクスカージョンで視察、体験した内容を振り返り、発表資料としてまとめたものを、若者レポーターが発表しました。

また、話題提供として岩手大学農学部の中本信次准教授に「震災被害から考える森と人との関係再構築」。福島県森林保全課課長鈴木明さんに「福島県の森林の現状」についてお話いただきました。どちらのお話も震災後の放射性物質や、森と人、森林と暮らしなどのキーワードが盛り込まれており、参加者のみなさんが真剣に話に聞き入っていました。

懇親会では、たくさんの地域から集まったみなさんで交流を深めながら、団体・個人としてつながりを広げるいい機会になりました。

■ アクションプランづくり

エクスカージョンでの視察や体験、振り返りでの話し合いや話題提供での学びを踏まえ、エクスカージョングループごとにアクションプランづくりを行いました。福島での森林と市民を結ぶ全国の集いでは、現状への理解を深めることに加えて、私たちには何ができるのか、ということをもみんなで考え、検討し、行動計画を具体的にまとめるということを1つの目標としました。

福島県内でできること、離れた場所でもできること、様々な角度から検討が進められました。また、以前からある課題と震災によって影響を受けたことにより、表面化してきた課題を整理しながら行いました。

①現状の整理（現状と課題）

エクスカージョンで見聞きしたことをベースに、現在その地区において課題となっていることをリストしました。また、その中で特に重要だと思われるものを整理しました。

②あるべき姿、理想の状態

現状と課題との対比になりますが、本来ならこうあるべきだ、こうなってほしいといった理想の状態もイメージしました。その理想と現実の懸け橋としてのアクションプランを考えました。

③現状からあるべき姿を実現するために、できることのアイディアを出す。

その懸け橋となるアイディアを出し合いました。たくさんアイディアが出ますが、効果的なもの、実現性の高いものなどを中心に具体案を掘り下げて、アイディアを絞り込みました。

④出たアイディアの中から、1つ以上具体的なアクションに落とし込む。

いつ、どこで、誰が、何を、どのように基本を押さえたアイディアとしてまとめ、今後実現可能なものを作り上げる、ということをゴールとしました。



全体会 アクションプランづくり

■ 「集い」によって、たくさんのつながりやアクションが生まれました。

福島での集いをきっかけにしてまだ小さな動きではありますが、福島県内各地で若者たちとの活動がスタートしています。主に活動する人の高齢化が課題となっている団体や人手不足に困っている団体と連携しての活動を行っています。

大先輩に道具の使い方や整備のやり方を教えても

報告 「森林と市民を結ぶ全国の集い2015 in 福島」～東北復興に果たす森林の役割と市民活動～

らい、実際に動きながら覚える。それを自分の団体に持ち帰りさらに活動する人が増えていく。団体間での良い循環が生まれています。ただ活動を行うだけではなく、なぜこの活動が必要なのか、森や里山の歴史などを含めて話を聞き、若者がモチベーションを向上しながら、より大きなアクションにつなげていけるよう、受け入れ団体、スタッフ側も日々考えながら一緒に活動に取り組んでいます。

福島開催が行われるまで、森林づくりに関わる団体の名前は聞いたことがあるけれど…、つながりを持ちたいけれど…、そのアプローチが難しいといったハードルがありました。

そして、「集い」での2泊3日の行程を通してその時間が取れ、集い終了後の新たな動きにつながる出会い、関わりが生まれました。

団体間、個人のニーズをすり合わせて、より良い活動、動きにつなげることができました（人と人をつなぐ、団体間をつなぐ…）。若い力を活かす場所、チャレンジできる機会の増加、連携が生まれました。



「集い」その後。若者を活動に呼び込む(いわき)

福島開催では、たくさんのつながりやアクションが生まれてきました。今回の東京開催、次回の京都開催でも素敵なつながりや出会い、発見がたくさんあるはずです。

この機会をみんなで活かしていきましょう。

「森林と市民を結ぶ全国の集い」20年の歴史

1996～2016

回	開催地	日程	開催テーマ
第1回	東京	1996/2/16～18	市民が支える森林づくり
第2回	東京	97/3/1～2	「市民が支える森林づくり」の実現をめざして
第3回	大阪	98/2/21～22	「市民が支える森林づくり」の新たな合意をめざして
第4回	宮城	98/12/5～6	「市民が支える森林づくり」の新たな活動の広がりをめざして
第5回	高知	99/8/19～22	山の中で考えよう!「みんなで支える森林づくり」 私たちがめざすべきものは何か
第6回	東京	2000/9/15～17	暮らしとともに築く森づくり
第7回	広島	01/2/9～11	新世紀 森林づくり・地域づくり・人づくり ーよりよき関わりを求めてー
第8回	群馬	02/9/14～16	ともに森を治める社会をつくりだすために 森と人と未来のための群馬ビジョン
第9回	北海道	03/11/1～4	地域に根ざした森林とのおつき合い 森林づくりの現在を理念から行動へ
第10回	東京	04/9/18～20	森とともに創るこれからの社会
第11回	愛知	05/8/26～28	森がうごく、人がうごく。そしてネットワークへ。 森と人との関係をさらに深める。
第12回	大阪	06/11/11～12	みんなが創る森づくり 森と共に生きる社会をめざして～参加から 協働へ～
第13回	福岡	08/3/8～9	暮らしにつながる森づくり
第14回	東京	09/12/5～6	今、あらためて問う「森林」の価値
第15回	岐阜	11/6/4～5	裏木曽の森を歩こう
第16回	東京	11/10/9～10	世界森林アクション・サミット
第17回	島根	12/11/2～4	神在月に集え!島根へ! ～森林と木を活かす縁結び～
第18回	東京	14/3/22～23	暮らしとつなげる森林の恵み ～都市の視点から考える
第19回	福島	15/6/12～14	東北復興に果たす森林の役割と市民活動
第20回	東京	2016/6/11～12	温故知森 ～森と私たちを結ぶ新たな道～

参加者アンケート

参加者：238人 スタッフ関係者：74人

2016年6月11日(土)～12日(日) 「全国の集い」アンケート

集計総数：85

性別

男性：50 女性：26 無回答：9

年齢

10-20 歳代：27 30 歳代：13 40 歳代：9 50 歳代：15 60 歳代：12
70 歳代：9 無回答：0

「集い」参加回数

初めて：68 2 回目：9 3 回以上：7 無回答：1

所属等

学生：8 会社員：28 公務員：11 農林水産業：3 自営：6 その他：27 無回答：2

その他の回答

大学教員、アルバイト、Retired、無職、無職、NPO 法人会員、大学生協、NPO、NPO 職員、分収造林契約、NPO、NPO 法人アルバイト、退職者、公益団体、団体、研究職、NPO 職員、NPO 役員、無職、団体職員、NPO

森林や環境関連のNPOなどに参加していますか。

参加している：48 参加していない：26 無回答：11

1 全体会 講演について

①興味深い内容だった：52 ②普通：8 ③期待したほどではなかった：2 無回答：23

感想

- ・ 心に響く講演でした。
- ・ 森やその周辺地域との関わりを考えることで、生き方を考えるきっかけにもなり、思いがけないところで、自分自身の今後について考える機会となり、有意義でした。
- ・ NPO の活動には直接関連がなかった。
- ・ 多方面に渡り、気づきを得ることができました。
- ・ 森林から脱線した話が多かったが西村さんの話は良かった。著作本も買おう。
- ・ 意味が感じられる仕事 営みの在り方についてアプローチしているお話はとても感慨深いものがあった。
地方は、地域にある「良いもの」を十分に活用しきれていない（ひらめき・ノウハウ等の問題から）。そこに関わる意義を感じ、地方に行くこと、自分も青い鳥を追いかけているからか、共感する所が多々あった。
- ・ 今まで自分が知らなかった考え方を知る良い機会でした。
- ・ 解体を想定した建物のデザインという話は興味深かった。
- ・ 都会での緑づくりの技に感銘した。
- ・ 国産材を都心部で売る仕事をしていますが、暮らしを地域で仕事を都会でできないかとまさに模索しているところで、大変勉強になりました。
- ・ 「営み方」それだよなあ、と思いました
- ・ デザインという点から森について考えるというのが新鮮だった。
- ・ 都会から田舎へ移住 素晴らしかった。
- ・ 示唆に富んでいて聞きごたえがありました。
- ・ 何を伝えようとしたいたのかがもっと明確になっているとよかった。
- ・ 初めて聞く活動、スタイルを沢山耳にし、チェ熱出そうです。
西の方の話はイメージできないところがあるけれど、面白かった。
- ・ 西村さんの講演の「意味のある仕事」、働き方→営み方というお話は、ちょっと心に波風が。神山での集合住宅のプロジェクトは、取り組み方が本質的（従来のシステムからすれば革新的）で、思わず身をのりだして聞いてしまいました。内山先生の「多様性」という言葉は、全体を貫くキーワー

ドになった、と思いました。

- ・ 空家をかかえており、更地にするか、リフォームするかを選択をしなければならないが、講師の方のお話を伺うと、もっと別な道がありそうに思った。（産廃を出さない、など）
- ・ これからは、“働き方”のみでなく、それを含めた“生き方”、“暮らし方”のようなものを大切にしなければいけないと思いました。
- ・ 多様性の大切さ。この言葉を信じています。
- ・ 西村さんの本を、10年程前の人生に迷っていた時期に、何度も何度も読んでいました。“自分”についてから“人”についてにテーマが移っていて、とても興味深かったです。いろいろと考えようと思いました。
- ・ 意味が感じられる仕事について、あらゆる行動がそれぞれ、それなりの意味を持っているのでしょう。ある時は立ち止まり、じっくり自分をみつめ直し、それなりの意味を考える時が必要ではないのでしょうか。
- ・ 環境をデザインすることで人のコミュニティをよびもどす。
- ・ “意味のある仕事”をつくるという西村さんのことばが印象的でした。暮らし方、生き方には様々な形があると改めて感じます。
- ・ ミライを見据えた場合、健常者のみでは、開けないと思う。その話があるといいかも。
- ・ 建築家、ランドスケープデザイナーの仕事に感銘を受けた。
このような斬新なデザインの建物が田舎の風景に溶け込みつつ、村の拠点、シンボルにもなっていけばよい。平凡な建物だと何も起こらない。
- ・ “make your work”という言葉がとてもしっくり来た。その中で意味のある仕事を追求できなくなっている要因はどの様なものであるか等が気になった。
初日に西村さんをマッチングした事務局の方々のセンスが素晴らしいと思います。ランドスケープデザイナーや西村さんの著書に出会えたことは大きいです。
- ・ 新しい視点を得られた。
- ・ 新しい視点、まちづくりの観点が学べて良かった。
- ・ 西村佳哲さんの講演がとても勉強になりました。
内山節先生の多様性のある社会、その地域らしい社会づくりと通じる内容でよかった。
- ・ デザインという切り口は無限大の可能性を秘めていると思った。
- ・ 建物をつくるにあたっての思いが聞けてよかった。
- ・ 西村さんの本はいくつか読んだことがあったので、ご本人のお話を伺うことができて良かったです。
建築と森の多様性も感じました。
- ・ 神山町における今後の取組み期待するところ大です。

- ・ 人々の暮らしと生き方に森林や自然がかかわることで、生き生きとしたものになるのではないか・・・と思わせるお話でした。結果だけでなく、そのプロセスそのものが、私達の暮らし（営み）なのかと感じました。

2 全体会 若者登場!

①興味深い内容だった：49 ②普通：9 ③期待したほどではなかった：4 無回答：23

感想

- ・ 若い人達の持つ森に対する情熱が感じられてよかった。
都会が嫌だから、田舎に行くのではなく、やりたいことがあって、それがたまたま田舎でしかできない事であったという、自分の持つ情熱が良い形で活かされていると思いました。
- ・ 現在の若者の考え方がややわかった。
- ・ 現場体験が良かった（特に遅塚さん）。
- ・ 様々な立場の意見が聞けて良かった。
- ・ 同年代の方のリアルな意見を聞くことができて良かったです。
今後のことを深められる良い機会でした。
- ・ 現地での話、様子が聞けて良かった。
- ・ 若者のやりたいようにというのはあまり持っていない発想であった。
上の世代の考え方に縛られずに同年代達だけで現状の問題の解決策を考えることも必要かもしれない。
- ・ 若者のパワーに期待する。
- ・ 若い活動的行動力の話、大変すばらしく応援できればと思います。次回も参加させてもらいます。
- ・ 今を生きているということを実感しました。
- ・ 皆さんが地方生活を好きなのは意外だった。
- ・ ○×で質問されていたのがよかった。
時間の配分がむずかしいなあと、見ていて思いました。
女性の方がパワフルだと感じました。
- ・ コメンテーター、先生方のまとめコメント、深くて良かったです。
若者に押しつけない継承を強要しない姿勢には賛成ですが、本当にそのまま放置すると知恵も技も文化も変質するのでしょうかね。
若者世代は乗り越えられるのでしょうか？正直疑問があります。強いることも必要かもしれない。

- ・ 地域、活動内容など本当に様々な方が登壇されて興味深かった。もう少し、森と都市との関わり（都市にいながらどう森と関わるか）という点についてほり下げられたらよかったと思う。
- ・ 登壇者が多いのに、いろんな話題、ぶっちゃけ話など聞けて良かったです。
- ・ いろいろな森のかかわり方があるのだと気づきました。
- ・ 若者がそれぞれの”個”を素で生活して頑張ってる様は聞いてて楽しかった。
東農大の卒業生が6人のうち3人いて、素直に驚いた。すごっ!
- ・ 若者各々の個性（キャラ?）が際立っていて楽しいセッションでした!
みなさんの表現力の豊かさに脱帽です。ひとつひとつの取り組みが尊いと思いました。内山先生の「これからは、”地方だからできる”という時代になる」言葉に納得ができた1日でした。
- ・ 若い方々（20代～30代?）が「森林」に係る仕事/生活を選んだ事に勇気づけられました。
私は、60代後半で山仕事をするようになりました。
- ・ 若い人の多様な森との関わり方が印象的でした。
- ・ もう少し踏み込んだ内容を。
事前に質問を募集しても良いのでは。働いて3年以上たった人の話でないと説得力がない。
- ・ ・質問内容が重なっていた気がします。
・話す人が偏っていたように思います。
- ・ ちょうど、これからの働き方を考えているところだったので、とても刺激的な内容でした。みなさん情熱的で素敵だなと思いました。
自分がどうしたいのか、しっかり考えようと思います。
- ・ 人それぞれ、いろいろな動機で森林とかかわりを持っているし、活かし方があるのですね。
単に材の利用にとどまらず、関連した事業を起こすことが、山での生活の多様性を生み出すのかも。山に住んでない方がおりその方のお話が少なかったのが気になった。
- ・ 若人が森林に興味を持ち、取り組んでいる事がわかり、日本、世界、地球の未来に希望が持てた。大変ありがたい。若人の今後を期待してます。
- ・ 同世代の方々の熱意、行動力を強く感じ刺激的な時間でした。
- ・ 若者にもっと多様性がほしかった。外国の人や障害者の方とか。
- ・ 内容には参考になる点多かったが、少しまとまりがなく、もう少しスッキリしたコーディネートが望まれる気がした。（この種のパネラー・トークにはもう少し入念な事前準備が必要かもしれない）
- ・ 自身も東京生まれ育ちですが、多くの人が東京に集まってくことに疑問を持っています。インターネットが利用できる時代に人が集中しすぎ、きゅうくつにしていることは何か疑問に感じます。どうして東京に人が流入するのかをもっと真剣に議論すべきなのかと思いました。

若者の皆さんには”森へ移り実現したこと”を聞きたかったです。

- ・ 活力と意義づけが感じられた。
- ・ 移住のことなどの声が聞けて将来への考え方が広がったのでよかったです。
- ・ 森といっても、各地各人で多様な森との付き合い方があることを改めて知った。また地域移住に関するリアルな声も聞くことができた。
- ・ 実体験の上での感じたこと、考えることをシェアしていただけてよかった。
コメンテーターの3先生のお話には、気づきが多かった。
- ・ 同世代の若者が全国各地で情熱を持って活動に取り組んでいる話を聞いて刺激を受けた。
理想を現実のものにしていけるパワーを感じた。
- ・ 自分がやりたいと思うことを主軸にする、ただやりたいことは実は縁によって生まれているという話が心に残った。
- ・ 個性的な方が多く面白かった。
皆さん考えをしっかりと持っていると思った。
- ・ 女性の元気の良さ、改めて実感しました。
- ・ 若者の発想は”自由”だとあらためて感じました。見知らぬ世界に飛び込む勇気とそれを継続していく行動力に敬意を表したいと思います。
森林や山村に興味を持つ若者がいるということは救われる思いです。
- ・ 若者の「森林」に取り組む有様が臨場感十分に伝わってきておもしろかった。

3 分科会(参加した分科会)

①生きる：23 ②遊ぶ：5 ③学ぶ：17 ④デザイン：6 ⑤エネルギー：11

無回答：23

①興味深い内容だった：45 ②普通：5 ③期待したほどではなかった：1 無回答：34

感 想

- ・ 現在、自分が関わっている森との基層的な考え方を考える機会を得ることができた。知見が広がり、楽しかった。(③学ぶ)
- ・ 過去から東京につながる森(③学ぶ)
- ・ 付箋式の構図作成の方法に発展が見られなかった。その方法の発展工夫がほしい。何回やっても愉快になれない。(①生きる)
- ・ すべて「意味を感じられる」仕事をしていると感じました。(④デザイン)

- ・ 講師陣の人選がすばらしかった。テーマも「学ぶ」では伝わらないほど深くかつ多様な対象であったが、最終的には「変わるものと変わらぬもの」森と人のかかわりが自と生みだす思想が実はあるのではないか。きっとあるに違いない。それをひとりひとりが見つけられるような方法論や技術を示すことは今すべきことのひとつかもしれない。という内山氏の結びやメッセージも腑におちいい気分です。ありがとうございました。(③学ぶ)
- ・ 木質バイオマスエネルギー国内開発はこれからです。(⑤エネルギー)
- ・ 実際に山村で生活を成り立たせている、しかも世代の近い方の声が聞けて、有意義でした。(①生きる)
- ・ 山(地域、田舎)で暮らすことの実態、課題等が浮き掘りになり、認識が深まったと思う。(①生きる)
- ・ いろいろな人の活動を聞いたのがよかった。
ワークに関しては、せっかくいろいろな場所からいろいろな活動をしている人が集まっていたのに、前提の共有や目的とゴールを設定していないため、表面的な話に終わっている点が残念でした。(①生きる)
- ・ 体験者の話はやはり重みと厚みが有る。
問題意識の共有ができて良かった。(①生きる)
- ・ 実務的な内容は充実していた。(⑤エネルギー)
- ・ 若い世代の人たちと対話(コミュニティ、コミュニケーション)できる言葉を豊かに持ち合わせたい。(③学ぶ)
- ・ 地域に入り、山仕事をボランティアではなく、お仕事として生活されている方々のお話を聞いたのが良かったです。(①生きる)
- ・ せっかいいい報告があるのだから、それを活かす中味をつくれればもっと納得がいったのでは(参加者はおそらくスッキリしなかったのでは)。かみ合わない感じだった。バイオマス発電をテーマにするにはこの会の性質、現状から少しムリがあったのでは。もっと森林活動に視点を絞ったの分科会テーマにした方がよかった気がする。分科会テーマにムリがあったのでは、が感想です。(⑤エネルギー)
- ・ 発表者として参加させていただきました。
他のお2人のお話の間中、ワクワクしていました!
参加者の方から色々お声がけいただき、もっとたくさん参加された方々のお話を聞きたいと思いました。(④デザイン)
- ・ バイオマス発電の過剰な期待は、リスクがあると感じました。
適材適所をよく考え、木を丁寧に使う事が必要ですね。
みんな電力、炭、ともにたいへん参考になりました。(⑤エネルギー)

- ・ 自伐型林業の起業、山林での自立生活、木材の「出口」3方のお話には、自分の今後の生活との縁があり、大変参考になった。
グループ発表では、各人の経験や問題意識が出され、自分の考えも少し整理できたと思う。
(①生きる)
- ・ 博識なみなさまのお話で、非常に面白かったです。(③学ぶ)
- ・ 全体の構成なども良かった。
ほとんど外で体を動かしてできたので良かった。
環境教育にも応用できそうで面白かった。(②遊ぶ)
- ・ 少し難しく感じた。基礎を軽く触れて頂けるとなありがたかった。ただ、とても勉強になったので参加して良かった。(⑤エネルギー)
- ・ 少しつかみどころの無い難しい内容でした。山や森への信仰・畏れについて改めて考えさせられました。保護・保全には必要なのだと思いますが、この現代でそれをどの様にすれば持ち続けられるのか？原発事故による山林の汚染は新しいタイプの怖れなのかも？(③学ぶ)
- ・ 事前に発表者への質問を募集して、多いものを当日に聞いてみるようにしても良いかなと。(①生きる)
- ・ 午前中しか出られないので参加しようかどうか迷ったのですが、実際にお話を伺うと、様々な情報やヒントが得られ来て良かったと思います。NPOにも入ろうかなと思いました。(①生きる)
- ・ ・発表者の皆様から大変有意義なお話をいただきました。
・グループワークでも、同じグループの方とのディスカッション、他のグループの発表により問題意識が整理できました。
・手際良い進行もありがたかったです。(①生きる)
- ・ 実際に森の中で活動できて、楽しい時間でした。
何よりも講師の方々がイキイキとしていて、日々の活動自体も、活発に活動されているのが伝わり、刺激的でした。
この経験を励みに、今後、森林と関わっていきたいと思います。(②遊ぶ)
- ・ 話を聞いてこの様な方法もあるのだと思い、若かったら飛び込んでゆきたいと思いました。入ってみたいとわからないことも多いのでは。(①生きる)
- ・ エネルギー 最後に私の竹藪化の進む農村地帯が何とかなりそう(竹炭、竹パルプ)～今後自分がそことどうつながるかを行動していかなくちゃとヒントいただきました。ありがとうございました。(⑤エネルギー)
- ・ 山と都市をいかにつなぎ、どれだけ多くの人の意識を山に向けることができるかそのお手伝いをできる人になりたいと思いました。

- ・ どのお話も面白かった。
街の木の有効活用、主都市を緑化する事業、自然を感じるアートのどれも現場を見てみたいし、活動に参加してみたかった。
今大学で森林科学分野を学んでいるから科学的な視点だけでは分からないような貴重な話が聞けてよかった。(④デザイン)
- ・ 各発表者の話し、とても深度があつて良かったです。もっと個別に話を伺うと思いました。(③学ぶ)
- ・ エネルギー利用の問題点の基本がザックリとつかめた。新電力会社の取り組みも新鮮味があつて参考になった。(⑤エネルギー)
- ・ 分科会報告を若者がやるのがとてもよかった。
聞き手として学んだことと感じた感想が素直で、はっとさせられる意見もありました。ぜひ今後も続けて下さい。(⑤エネルギー)
- ・ 私自身は「工芸」を専門に教育や研究をしていますが、どの時代のどんな「工芸」を保護や伝達していくのか難しいと思っていますが、「山」や「林業」などにも同じようなむずかしさがあると思いました。(③学ぶ)
- ・ 気づきに多く恵まれた会でした。(②遊ぶ)
- ・ ・谷吉さんと伊藤さん：個人のとてもローカルな取り組みが聞けて、自分にもできるかもと思えた。
・西原さん：大きな問題について、関係者、団体と繋ぐ役割の組織を作られたことにとても興味を持ってました。これまで自分が様々な活動をしてきた中で、まさにそこが足りないと感じていたので、応援しつつ、私もどのように関わっていけるか、いくつか考えさせられました。(①生きる)
- ・ 移住の不安やグループワークが良かったです。(①生きる)
- ・ 信仰や歴史という観点から森の思想を深める機会になった。
身体性と感覚の議論は、技能・技術論にも広がりそうだった。(③学ぶ)
- ・ ・山側（地域）受け入れ体制
・Iターン者の不安、悩み等
どの地域でも抱える問題は同じだが、明確な解決策があるようでない。しかし、本日登壇してくれた3名の方々はまず地域にとび込んでみて、そこから試行錯誤して今があるのだなと感じた。(①生きる)
- ・ 都市でBizをしていらっしゃる湧口さんと宮田さん。
自然の中の人間の位置づけ?を体験できるようなARTを発進される木村さん。
それぞれのお話に、日々もやもやしていることの解決のいと口になるような key words を頂けたような気がしています。ありがとうございました。(④デザイン)
- ・ 新しい道がみえた(④デザイン)

- ・ 林業、山に関わることに興味はあるが、自分ができることは何か?考えていたので、実際に関わっている方の話を聞けてよかったです。記事で読むだけでは知れなかったことも、知り感じることができるリアルな話でした。ワークショップでは色々な意見がでましたが、出てきた課題は、山村だけの課題ではない気がしました。明確な解決策は分からないのですが、もっと関心をもって話を聞きに、外に出向いていきたい意見をもっていきたいです。(①生きる)
- ・ 音や手触りや見方を新しく刺激され、気付きの多い会でした。ありがとうございました!(②遊ぶ)
- ・ 街中がフィールドなのが新鮮
・ 多様性がコンセプトになることがなるほど。
⇒志の高さがなりわいの根幹にあると感じた。(④デザイン)
- ・ 楽しいワークショップでした。
自然の中で(身のまわりで)子どもたちと一緒に遊びをつくって楽しむことに、また少し目が開けたように思います。
倉品さんのアルパ演奏は素晴らしかったです。(②遊ぶ)
- ・ 退職後から考えてみようという私のようなものは、十分なこともできず、とっかかりもむずかしいと思います。(①生きる)
- ・ 「先人の知恵」とは何か?それをどう学んでいくのか?山への恐れと山の恵みへの感謝が様々な形で、地域地域で伝わってきた。
文書や映像などの情報だけの学びでは真の学びにはならないと思う。身体で学ぶ、暮らしの中で学ぶことの大切さを感じました。(③学ぶ)
- ・ 内山氏は素晴らしい。(③学ぶ)

4 今後も「集い」を計画しています。どのような内容を望みますか?

- ・ 森と地域と人の縁
- ・ より包括的な有識者同士のディスカッションが見てみたいです。
- ・ 森と樹木と生きる暮らしを都会で広める活動を紹介する内容のディスカッションなど
- ・ 森が森であるために
- ・ 木に対していろいろ思っている、他分野の人々に会いたいです。
- ・ 第3分科会の試み、テーマ、議論は今後も大切な柱(思想)として、ひきついでほしいと思います。
若者レポーター企画よかったです。次世代の姿が見えて来たような気がしました。鹿住さんのまとめもよかったです。
- ・ 市民と森の結びつきによるビジネス化。特にNPOの自立

- ・ 森林関係者の中だけでやるのではなく、もっと一般市民を集めてやる部分もあってもいいのではないかと思いました。農山村で暮らしたい、山で働きたいという人と今、森林関係で（農山村、行政）働いている人たちがマッチングできれば、もっといい会になると思います。
- ・ 今回参加されていない地域の人々の講演も聞いてみたい。
今回参加できなかった別の分科会にも参加してみたい。
- ・ 諸団体や個人の活動、Iターン、Uターンしている方々の体験や情報を共有・アップデート・アクセスできる場をどう作るか、検討する内容は如何でしょう。
- ・ ・海外事例より得られる示唆
・アーティスト、アイドル、～メディアとのコラボなど
- ・ 山森と若者をつなげるような企画（雇用とか仕事紹介みたいな・・・？）のがあると、興味があります。
- ・ この「集い」から色々な”つながり”や”きっかけ”が生まれていると思います。そんな”つながり”や”きっかけ”から具体的にどんな動きが起きたのか、知ることができたら良い（またその動きに参加する人が現れる!とか）と思います。
☆とても心楽しい2日間でした。事務局の皆さま、ありがとうございました！
- ・ 海や川の集い
- ・ バイオマスエネルギーにおける現場の方のお話を聞いてみたい。
- ・ 森の生き物についても取り上げて欲しい。ハンティング（レジャー）ではない、狩猟関連の話しも聞いてみたい。
- ・ 参加者からのテーマを募って分科会をやるようにして欲しい。申込の時点で募集しても良いですし、1日目でも良いので。
- ・ 鹿住さんがまとめられていたとおり、NPOも事業法人も老若男女、様々なテーマで集まれる場としての「集い」だと思います。
「森林を活かす」には、「森林」でどう食べる（生活していく）かという点を追求していく時期かと考えた。
- ・ かかわりが浅いので、何を聞いても楽しくおもしろく2日間をすごさせていただきました。
- ・ 森関係の人達との交流、情報交換の場
- ・ 日本の健全な森林環境をどう作るか、若人をどうまきこみ、希望ある未来作り等
- ・ 多様な人を呼んでほしい。
- ・ 外国人の学生さんの視点、入れてはと思います。京都楽しみです。
- ・ ・経済的に成り立つ仕組みを考える。
・政府、行政の仕組みの改善への提言へとつなげていきたい（大元がしっかりしないと、庶

民の努力が浮かばれない)。

- ・ 今回の分科会のテーマはそれぞれ魅力的で他の分科会の内容も聞きたかった。それぞれのテーマで集いを開いてほしいと思います。
- ・ 分科会を一つに選ぶのが難しい。A.M./P.M.を別の内容の選択ができるとよい。
- ・ 今回のような意欲的で斬新な活動をされている方を招いての会。
- ・ 今回のように難しくなく、個々の活動が意義、様々な取り組みが又聞けると良いです。参加型のグループワークも一つの「多様な意見」を聞く場として勉強になりました。
- ・ 森林への様々な観点の切り口があると楽しみです。
- ・ ・林業事業体（民間）・森林組合・森林ボランティア
それぞれの地域の関わり方やお互いの存在をどのようにとらえ、感じているのかを知りたい。
- ・ 若者トークショーは今後も取り入れてほしい。
(同世代の人、先輩方にもいい影響が生まれているように感じた。つながりも作りやすい)
- ・ オンライン配信してほしい。
- ・ 現在取組み中の若者による参加促進を一層促進してほしい。
- ・ 介護などもかかえて、自然とかかわることをして、自分も年齢がたかくなってもやっていくことをさげるテーマに関心があります。
- ・ 火による山野の再生をテーマにした集い

その他

- ・ 参加させて頂きありがとうございました。スタッフ、実行委員の皆さまありがとうございました！
- ・ 東北にいて、西の活動について知る機会なかったので、面白いとりくみを様々勉強することが出来て来て良かったと思います。
多様化、多様性が全体会に流れた今回のテーマだったようですが、森も全国多様、活動も従って多様なんだと思う。
視点を活かす意味での相互交流はいいことだと思う。とにかく 20 年つづいていること自体がすごい。
アルパいいなあ。東北まで来てくれるだろうか。連絡してみます。
- ・ より一般的な人でも参加しやすい「集い」もあってもよいと思った。
やはり参加されている方は森林に関するような職の方が多く、話を伺うのは面白かったが少し場違いな気がして心苦しかった。
一般的な人も参加しやすいものがあれば参加してみたい。
- ・ 私は普通の会社員ですが、アメリカの 9.11 を通して、社会、環境、経済全てに、もっと私のような母数の多い普通の会社員一人一人が考えて行動することが重要だと考えるようになりました。
元々、子供の頃山奥で育った時期もあり森林に興味があり、養護施設で育った事から、地域社会とボランティアは、自分にとってもずっと切り離せないものでした。
そんな中で、勤めた会社の労働組合の社会貢献会活で、中国の砂漠緑化活動→国内の森林ボランティア活動、3.11 から RQ 災害ボランティアとの関わり→災害ボランティア活動、と普通の会社員でも様々な体験をすることができました。
今日の分科会の中で、自分はいずれも専門性のある活動はしていなく、立場としても異質だと感じましたが、普通に働く私達が、もっと企業や社会から、このような環境、社会、教育などの持続的な社会のために内部から何ができるか考え実践していけば、もっと地域も社会もよりよいものになると思っています。又次回を楽しみにしています。ありがとうございました。

お答えいただいたアンケートのうち、ここに掲載しなかったものもあります。また、表現を一部変更したものもあります。

「2016 森林と市民を結ぶ全国の集い in 東京」実行委員会

赤 池 円	私の森.jp編集長 (有)グラム・デザイン
石 山 恵 子	遊学の道 Project 代表
糸 川 結 花	林業女子会@東京
内 山 節	実行委員長 哲学者 NPO法人森づくりフォーラム代表理事
鹿 住 貴 之	副実行委員長 認定NPO法人JUON(樹恩)NETWORK 事務局長
久保田繁男	西多摩自然フォーラム代表
後 藤 洋 一	NPO法人樹木・環境ネットワーク協会
佐古田睦美	(公社)国土緑化推進機構 森林づくり政策担当参与
多 田 知 子	(一社)木づかいビジネス協議会理事
原 田 敏 之	NPO法人森づくりフォーラム理事
松 井 一 郎	森林インストラクター東京会
水 谷 伸 吉	(一社)モア・トゥリーズ事務局長
宮 林 茂 幸	監事 東京農業大学地域環境科学部教授
山 岸 貴 生	NPO法人地球緑化センター事務局長
中 沢 和 彦	事務局長 NPO法人森づくりフォーラム

● オブザーバー

中 井 正 博	林野庁森林・木材産業情報分析官
富 永 茂	(公社)国土緑化推進機構 政策企画部長
黛 友 梨	東京学芸大学

● 運営スタッフ

宮 本 至	NPO法人森づくりフォーラム
樋 口 満 里	NPO法人森づくりフォーラム
遠藤紗穂里	認定NPO法人JUON(樹恩)NETWORK
富 井 久 義	認定NPO法人JUON(樹恩)NETWORK
種池真依子	NPO法人樹木・環境ネットワーク協会
東京農業大学学生のみなさん	

「2016 森林と市民を結ぶ全国の集い in 東京」報告書

発 行 日	2016年6月
編 集 ・ 発 行	「2016 森林と市民を結ぶ全国の集い in 東京」実行委員会
事 務 局	NPO法人森づくりフォーラム 〒113-0033 東京都文京区本郷2-25-14 第1ライトビル405 E-mail: office@moridukuri.jp
編 集 担 当	中沢和彦
写 真	小森洋昌 後藤洋一
表紙イラスト	黛 友梨
デ ザ イ ン	(有)グラム・デザイン

